

30

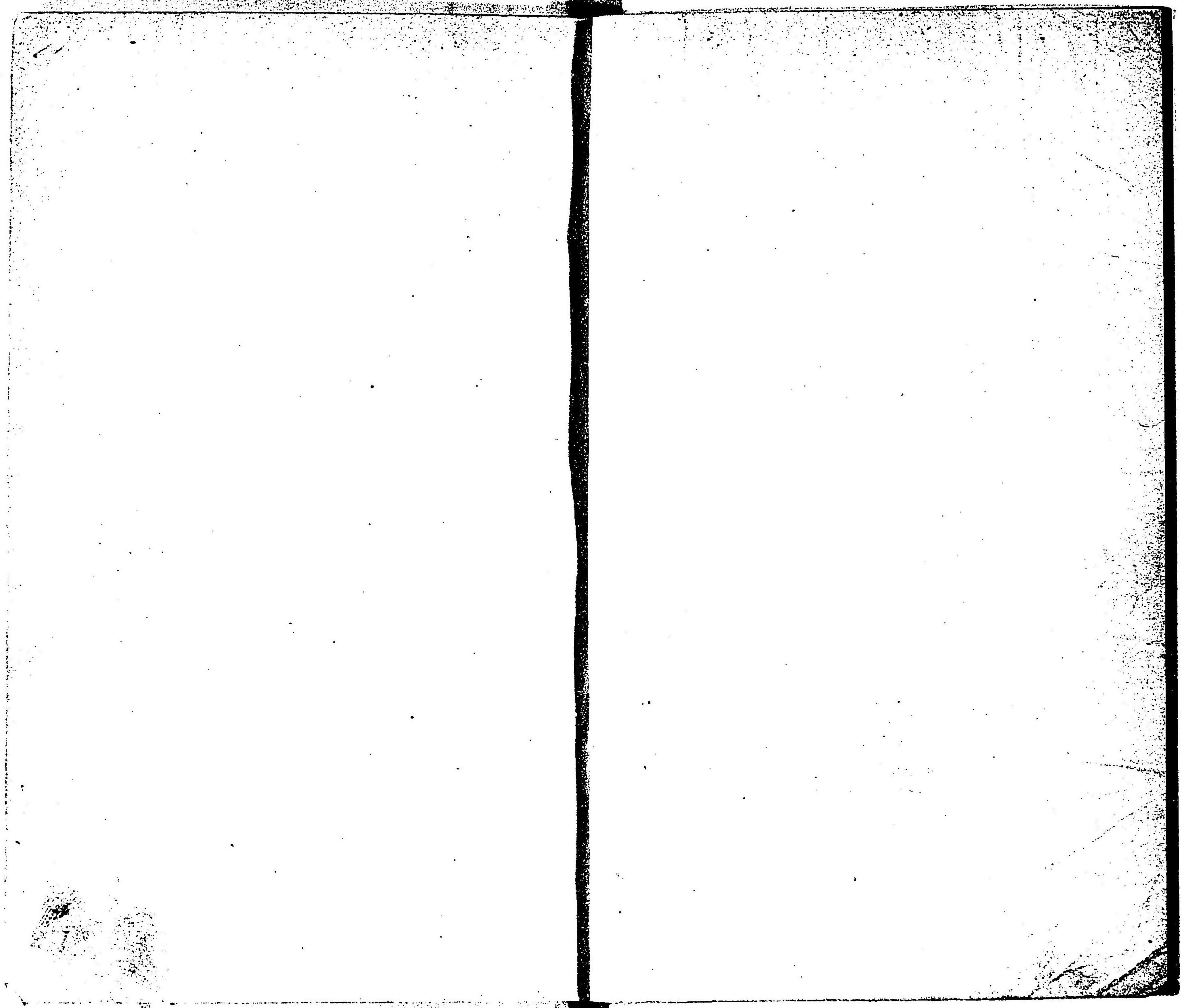
191



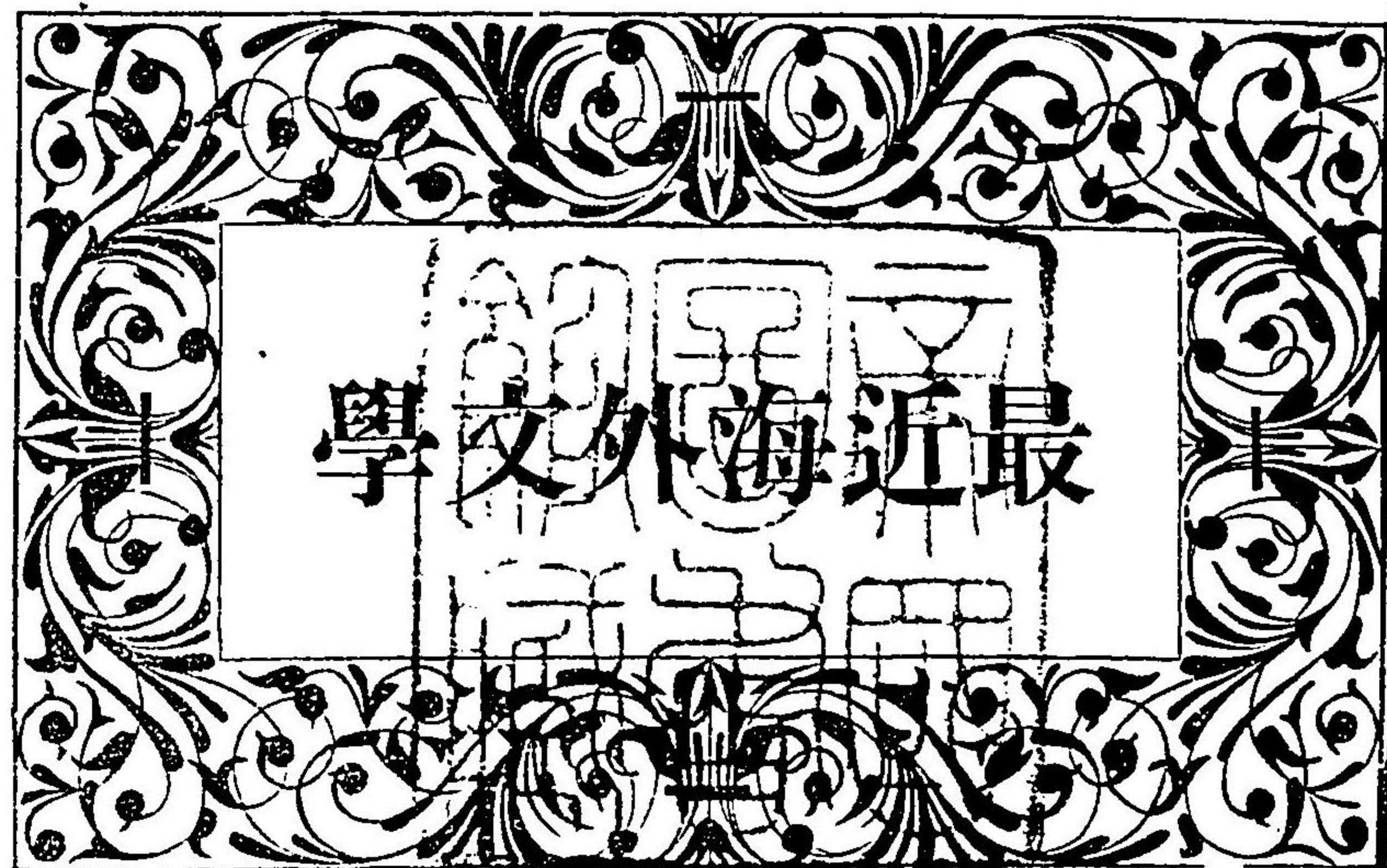
學文外海近最

著 敏 田 上 士 學 文

版 藏 館 友 文 京 東



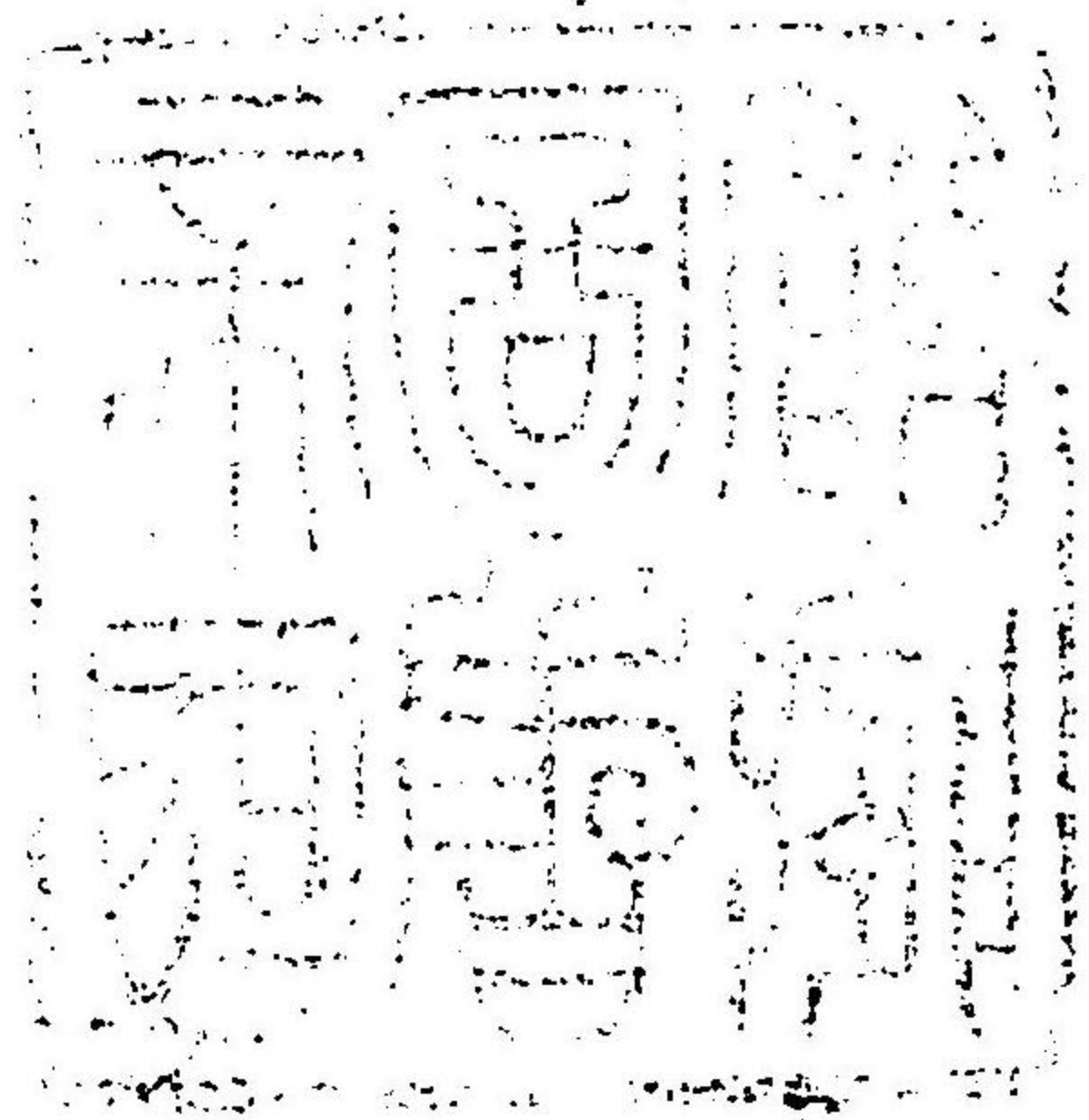
30-191



著 敏 田 上 士 學 文



版 藏 館 友 文 京 東



最近海外文學序

客の來りて、瀛西藝苑の近事を問ふ者多し、英佛詩壇今たれを以て第一人となす、南歐碧空の地なほ往昔の風雅ありやと。げに新様を賞づる人情の常はさることながら、吾等絶東の民、業に已に文明の長江に投じ終んぬ。今日に當て最近思潮の濬に掉さゝむと欲するもの、また基なき徒らの好奇にあらず、是に於てか、かうやうの熱望に應じ、まづ其需要の一端に供せむとて、聊か、この著あり。

本書掲載の諸項皆一たび雑誌「帝國文學」の一欄「海外騷壇」のうちに見れば、今許諾を得て、再録するものなれど、各條皆訂正を加へ、おほかた補遺を附し、氏名に生死年月を添へ、また精緻の研究に従はむとする人の爲

に、参照の書籍をあげたるもの少からねば此書存在の理由なきにしま
あらざるなり。

明治三十四年十一月

東京

上田敏

二

最近海外文學目次

エドマンド、ゴッス	一
虞翁の新著	三
世紀末年の文壇	七
千八百九十四年の英文學	一〇
珍書の發見	一四
佛文壇の消息	一六
カリエル	二四
マティウ及びパラスホス	二五
セルキン、イメイジ	二七
レスボス島の口碑傳説	三三
クロムエル塑像の詩	三七

フルズラルス名歌の替歌……………三九
 文學史の著述……………四一
 史家ライベル……………四八
 ホメエロス學の新説……………五〇
 大辭書の出版……………五五
 羅旬文學の評論……………五八
 ワトソンの新詩集……………六三
 カストロ及びエチエガライ……………六七
 獨逸の女詩人……………七七
 新桂冠詩人……………七八
 中世に於けるエルギリウス……………七九
 佛國翰林院……………八五

少デユウマ……………八七
 マレエの新撰英辭書……………九〇
 オット、ロケット……………九五
 エドモン、ドッゲンクウル……………九八
 佛蘭西文學史編纂……………一〇二
 ダンテの俗語論……………一〇六
 ハウプトマン……………一〇八
 ビエル、ロテイの新著……………一一一
 翰林院の二新學士……………一一五
 近刊書選……………一一九
 シイマンの擬似詩……………一二四
 中世文學史……………一二七

デニモリエ	一二九
基督の訓誡	一三四
六十年前の英文壇	一三七
近世神話學	一三九
インシエロウ	一四一
文學者と音樂	一四四
ペラミイの新著	一四九
キップリングの新作	一五一
テニソン卿の傳	一五四
ドブソンの詩集	一五六
ドデエ	一五九
ワトソンの新著	一六一

最近海外文學

文學士 上田 敏 著

Edmund Gosse

十八世紀の英文學に精通し兼ねて北歐の詩文を英國の文壇に紹介したるを以て名あるエドマンド・ゴッセ(一八四九年生)は詩人として亦令聲あり。これまで Madrigals, Songs and Sonnets (1870) On Viol and Flute (1873) King Erik, a drama (1876) New Poems (1879) Firdausi in Exile and other Poems (1885) の作ありしが千八百九十四年復詩集一卷をハイチマン社より公にしたり。題して In Russet and Silver と云ふは青春の血氣未だ定まらざりし頃は、

紅袍をかざし黄金を鑲めたらむ如き詩文を物し、が今や漸く人生の
晩秋に近き天命を知る事も稍深きまゝに、折節のすさびも綺羅びやか
ならぬ蔭色となり、白銀の沈みたる光に移れりとの意なり。されば何
となく沈靜なる裡に、高雅の妙趣を具へ、押韻の自在なる、聲調の自然な
る、卷中一篇の凡句なけれど、就中ステイヴンソンに與ふる歌に復韻の難
律を用ゐて、流暢優雅なる、またトロキイの律に、快活の調を失はずして、
而も天然の雅致を合せたるなど、全卷の白眉なる可し。其他テニソン
を惜む歌には眞摯の氣顯はれ、ロセッティを憶ふ賦には、珍らしき情熱の燃
ゆるを見る。Chatterin と云ふ歌に「スベンセリヤン、スタンザ」を用ゐて
夢みる如き幽婉の調をなせしは能く此韻律の秘密を會得せし者にし
て、スキンバアンを除くの外、現存名家中、此の如く詩形の妙機を曉り得
たる者なかる可し。卷末に載せたる「マスク」の辭は、王立水彩畫會の爲

に物して、英國皇太子の御前に演せられしものなりと云ふ。快活華麗
を旨とせる歌なれば、歡樂の筵に適應しく、遠くベン・ジョンソン、ミルトン
などの盛時をも追想せしむ、コウマスの高調今に至る迄餘音尙ほ絶え
ざるは英國詩壇の爲に賀す可き也。

虞翁の新著

グラッドストウンが光榮ある政界の經歷も千八百九十四年を以て、其終
に就き、今や功成り、身退きて閑散の地に晩年を樂む事となりしより、心
は青春の學に歸りて終にホラテウスHoraceの歌を譯せり。「オウド」全篇加ふ
るに、カルメン、セクラアレを以てし、マレイ社より出づ。顧みれば、國教
論を著はしてマコウレイの賞嘆を蒙りしも、既に五十餘年の昔語とな
りぬ。爾來暫くも靜まる事なき政海の波瀾を凌ぎ、樞閣議堂の間を往

來して、高潔雄邁の伎倆を振へる際にも、詩文の人世に於ける價值は瞬時も忘るゝ所にあらず、或はホメエロスを論じ或は現代小説を評し、英雄の胸中綽々として餘裕あるを羨ましむ。されば齡傾きて心なほ明かに奮つて古文辭の翻譯に従事したりと聞かば、作の功拙を問はずして先づ其精神を激賞すべきなり。況んや譯詩の能く原意を傳へ且つ聲調の美を失はざるに於てをや。蓋しホラテウスの譯し難きはエルギリウスに次ぎ、昔より名家の試みしもの數多あれども、典雅簡勁なる原調を傳ふるもの極めて稀なり。その譯に二法あり、一は原歌の意義を流暢平易なる英詩に移し、ひたすら拮屈ならざらむを勉む。其弊や往々冗漫に陥り原詩の雅純を毀く。ステイヴン、ドゥ、并イア譯の如き此法に従へり。二は原詩の意を傳ふると共に聲調を失はざらむと欲し、假令時として難解の句を生ずるとも、簡潔典麗なる羅句調を離れざら

むとす。虞翁の法は即ち是にしてミルトン、コニングトン亦此法を用ゐぬ。想ふに虞翁の譯詩法にして完全の域に達しなばホラテウスが眞の風姿に接するを得べく、之に反してドゥ、并イアの法に従はゞ假令譯し得て流麗なりとも、其美は譯詩の妙にしてホラテウスの趣にあらざる可し。果せる哉、詩風高調に達する時は下記金玉の文字に現はる。

Our span is brief. The niggard hour in chatting ebbs away.

Trust nothing for to-morrow's sun, make haste of to-day.

(et spatio brevi

Spem longam resces. Dum loquimur fugerit invida

Astas. Carpe diem, quam minimum credula postero.)

リケエにおくる歌には紅顔の衰を悲むと共に輕妙なる諷刺嘲笑をよせられたれば、虞翁が輕快なる「トロキイ」を用ゐしは大に當れり。

Coan purples, gems that blaze

Will not bring thee back the days

Writ in annals known but past

Of the time that fled so fast

(Nec Coae referunt jam tibi purpurae

Nec clari lapides tempora, quae senel

Notis condita fastis

Inclisit volucris dies.)

六

ホラティウスの極めて譯し難きを豫知して、此等の詩を味へば、虞翁が苦心經營の程を察す可く、成功の豫想外にめでたきを察し得可し。 *Quis multa gracilis te puer in rosa* 「さうびの床に君を挑むわかうどはたが子ぞ」といふミルトン譯は天才の秀逸なれば比ぶべくもあらねど、虞翁が新

譯はダアビー卿のそれに優る事數等なり。勿論全卷のうち往々平凡薄弱の句なきに非らざれど是は如何なる翻譯にも免れ難き事なるを、翁が政界の經歷を想ひて此卷を繕けば益々理想の高俊に感じ、些細なる瑕疵の如きは措きて問はざらむとす。嗚呼逐日政治の界に齷齪して風雅の何たるを知らざる人よ、少しにても虞翁に私淑する所あれ。

世紀末年の文壇

七

十九世紀も漸く終末に近づき、人心の動搖益々甚しく、諸般の思想譁勃として蓄積し來るもの、人は他日の奮興を期して漫に輕發せず、會々暗潮の水面に渦紋を浮ぶるのみ。顧みて名人大家の上に及べば、一葉と散り二葉と落ちて、千八百九十四年晩秋の哀はつねよりも深く、夕に、*ホームズ Holmes* (一八〇九—九四)を悲み、けさ、*フルウド Froude* (一八一

八—九四を嘆きぬ。「朝餐雜話」三卷を紀念として逝きし名家の俤、今更に懐しく、急かに繕きて、輕妙の文致を味ひし者も多からむ。フルウドの史筆は典麗にして、光彩陸離、たとへ、フリイマンの考證該博なるに及ばずとも、今の枯淡なる史界には珍しき大家なりしに、千八百九十四年十月二十日、白玉樓上の人となりて、カアライルの逸事を傳ふる者絶えたり。フルウドの死に先だつ週餘、同月十一日、ニコル教授 Prof. Nichol の逝去に文界はまた雄健なる一評論家を失へり。享年六拾一歳、中年の頃は、壯快なる論客にして、哲學に、詩文に著述頗る多かりしが、近年病を獲て、久しく筆を絶ち、閑かに、老を養ひしも、夫人を失ひて、快々の日暮し、病勢を革め、終に此計を傳ふるに至りぬ。輓近西歐の天文星頻に隕ち、前桂冠詩人テニソンの歿に續きて、テエヌ Faine (一八二八—九三逝き、ルナン Renan (一八二三—九二) 去り、モオバッサン Maupassant (一八五

〇—九三)の清楚なる文も絶えて、文壇の寂寥たるもの之を久うす。スキンの傑作も既にいく昔の物語となり、スキンバアンのみはなほ青春の好調を繰返せども、述作罕なるは憾多く、ラルター、ペイター Walter Pater (一八三九—九四)の逝去、殊に悲し。この名家の譽は、生前よりやうく、文界の一隅に傳唱せしも、一般讀書界の尊崇未だ淺かりしに、われは先年「文藝復興論集」一卷を翻へして、幽婉の思想と文字とに驚き、其後、ひたぶるに、恩師と仰き奉じたるゆかりあれば、哀悼殊に深しとするを、たゞ頃日、コッス等の文學史に、此名人の贊辭を見て、いさゝか慰みぬ。英の小説界には、ハッガアド一流の殺伐奇談少しく廢れて、ワアド夫人などの宗教小説行はれ來り、佛の詩壇には、エルレエヌの幽聳なる新聲専らなるに、小説は依然として寫實派の勢衰へず、ドデエは曩に Port Tarascon を以て、タルタランの後日を語りしより、久しく消息を絶ちたれど、

ゾラの健筆は愈々鋭く *Père Pascal* に愛國の情をはのめかし、*Louises* の新著には、佛蘭西の新奇蹟を材として、人生の暗面に法門の慈光をあびせたるもゆかしく、「ナナ」*ラノムモアル*と著るしき反映を示しぬ。獨逸には深刻ハウプトマンあり、白耳義には、マアテルリンク、ロオデン、パッハエル、ハアレンの所謂新派文人の活動愈々目覺しく、南歐の藝苑、今著るしき進境なきも、希臘新邦の文運や、潑刺たる氣運を含めり。露西亞にはトルストイ伯の意氣、老來益々豪壯を極め、さきに戦争の罪惡を痛論して、全歐の法界を聳動せり。

十

千八百九十四年の英文學

この年、英文學は幾多の將星を失ひき。ベイタアの事既に述べしが、詩人にクリステイナ、ロセッティ *Christina Rossetti* (一八三〇—一九四)をなくしたる、

眞に哀悼の極なるべし。人も知る如く、此卓絶したる女流詩人は、*ダンテ*、*グブリエル*、*ロセッティ*の妹にして、巾幗の名家なるのみならず、十九世紀大詩人と伍して、殆ど遜色なき天才といふべく、詩風簡樸にして、わざとらしき彫鏤の蹤なく、別に一種、熱烈なる宗教の情緒あるを珍とす。

今の世のスコットと云はる、*ロバート*、*ルイズ*、*ステイヴンソン* *Robert Louis Stevenson* (一八五〇—一九四)の物故、また知るとなく知らざるとなく惜みあへり。述作の物語、小話、詩篇はた漫遊記、人口に膾炙したれば、説かず、われは、*Virginibus Puerisque* の雜文、よく「エッセイ」の體を得て、微妙の極に達せる評論文の類に邦人の注意を惹かむと欲す。この年また評家 *ロオデン*、*ノエル* 詩人 *エブスタア* 夫人、美術評家 *ハマトン* を失ひき。
ゾラ、*エルレヌ* の感化著るしかりし數年前とは、事異りて、小説界は極めて靜穩なりき。*ムウア* のに就て、少しく道德家の異議ありしも暫く

にして止みぬ。ブラック、ブラックモアの著には昔年の妙うすれ、ワアド夫
人 Mrs. Humphrey Ward (一八五一生) の *Marcella* は、多くの美を有すれど、小説の
巧を欠きホオル、ケイン Hall Caine (一八五三生) の *Manxman* は、邊島の俗を
描きて、熱情あれど、秀什の沈靜を具へず、キップリング (一八六五生) プレット、
ハアト (一八三九生) の新著、平生の高潮に達せざるも、獨り、トマス、ハアディ
(一八四〇生) の *Life's Little Ironies* といふ短篇數種、淡泊にして皮肉なる諷
刺を含みて、心悪き出色の文字なり。かくいひ來れば、英小説の現状頗
る心細きやうなれど、ジョージ、メレディス George Meredith (一八二八生) の如き
大宗現存する限は、失望の嘆聲未だ發すべきに非らず、人情の微を穿ち
て、同情濃かに、奇峭なる行文に高遠の思想を托して、大陸の作家と比肩
するとも、をさく遜色無からむとす。又フランク、ハリス Frank Harris
といふ新進作家の短篇中見る可き文字少からず、Elder Cookin の篇は、精

細なる觀察、美を擇ばず、醜を避ざる客觀の筆法ありて、簡勁の長あり。
詩壇の近作には、先づ指をスフィンバンの *Astrophel* に屈す可きか、聲調
典麗にして、韻律自由ある、アタランタ以來の妙を失はず、ゴッスは沈靜の
詩風に移り、ルイス、モリス例つもながら流麗の小詩を物し、ワトソンの
「頌歌」デギッドソンの「バラッド」騷人の評に上りて、頗る喝采を博せしが、近時
新聲の誦すべきもの、却て未だ命名を成さざる詩人に多し。例へばイ
イツ Yeats (一八六六生) の小劇詩 *The Land of Heart's Desire* は高雅にして、
往々靈妙の域に迫り、愛蘭土の人々といふ匿名詩人の作は、幽玄の神
祕想を含みて、自然觀の精緻にして、透察深きを特色とす。ケルト思想
の遺韻なほ、愛蘭土の山川に存するか。又アアチスト、リス Ernest Rhys
(一八五九生) に「倫敦薔薇花」セルギン、イメイシ Selwyn Image (一八五〇生)
に「カロール」數篇の著ありて、後者の斬新なる詩風、就中めでたし。

評論にはスキャンパンの詩文論集 *Studies in Prose and Poetry* ありてエウゴオの評論最も力を傾け、熱情の禁すべからざるあり。故サイモンズの遺稿ボッカチオ論は明暢なる閑雅の筆、其他ダイクス、カメルの「コウルリッジ傳」、オルディッシュの「英國劇場故實」、ライオチル、ジョンソンの「ヘアディ」を評したる文、各特色あれど皆ドブソンの十八世紀風俗史に及はず、評論界に限りていはゞ、*Eighteenth Century Vignettes* の年の傑著なりしか。

珍書の發見

世人が處女王朝の英文學を翫味激賞するに至りしは極めて近年の事なり。コリヤアタイス等が校正編纂の難事業を企てしより、悲壯奔放なる古戯曲抒情詩の上梓漸々江湖廣まりて、遂にアアバア翻刻となり、續いてプロサアト師が校本となりぬ。古書の異同を参照對比して考

證の精確なるは師獨得の長技にして、校本の世に行はるゝもの *Fuller Worthies Library, Chestsey, Worth's Library, Occasional Issues*, 等、共に皆訓詁の精緻、校正の嚴密を以て學者間に稱揚せらる。近年師は病痾の爲め文界を退きて久しく編纂の業を絶ちしが、今や健康舊に復し、法界の劇務亦漸く閑散に赴きしを以て、再び古書翻刻の大事業に身を委ぬ可しと云ふ。

是に於てか先年着手したるスベンサア詩集に第拾卷を加へ、ダニエルに尙二卷を増刊し又ニコラス、ブリトンの作にして未だ世に著はれざるものを上梓せむとす。然るに以上の新刊にも優りて英文學の爲めに大價値を有するものは、同師が近時の發見に係る古珍書にして、ダブリン府トリニテ、カレッジの書庫中に獲たる十七世紀中頃の古寫本二ツ折、約五百頁の一巻なり。 *Bacon, Farewell to Fortune. Philip Massinger. New Year's*

Year's Verse Gift to the Countess of Chesterfield. Thomas Randolph, *Epitulumium.* Francis Beaumont, *Oryll Tournent.* 此他猶短篇抒情歌の類數種、皆處女王朝の文學に一大光明を興ふるものを收む。

佛文壇の消息

バルザック(一七九九—一八五〇)、*シャルマサン*(一八〇四—一八七六)、*フロオベール*(一八二一—一八八〇)の三人は佛蘭西の三大小説家なり、而して近時現存の諸名家中時々物議を醸して毀譽褒貶の衝に當る者は常に寫實派の泰斗エミール・ゾラなれども、寫す所深く人世の恨事を穿ち、其著作に温籍淳雅なる同情の籠れるに至りては、*アルフォンス・ド・デュエ*の小説を優れりとす。悲哀極まりなくして鐵石の人をも動すは、*ゾラ*の物語に若くはなく、*ナバツ*の幽麗にして悲哀歡樂の間をたどるは宛

も五月雨の空晴れて葵の花の艶なるに驚く如し。其他「王家流竄録」には妖艶なる美女の姿を書きて深く讀者の心を動かす等、*英米小説家輩*の到底企及すべきにあらず。*フロモン*、*リスレエ*の妙篇、沈痛にして優婉の香を添へ、幾度も反覆熟讀の後には感興の深きを覺ゆ。*ドデエ*は近時久しく筆を執らず大に文壇の熱望に背きしが、先日終に *La Petite Paroisse* の著あり。其大意は佛蘭西の或る田舎に *リシアル*、*フェニガン*、といふ一紳士ありて、孤兒院に人となりし女を迎へて妻とし、暫らくの間はいと幸福なる月日を送りしが、程なくこの女、某貴公子の風姿言動に迷ひて、終に何處となく影を隠せり。*フェニガン*これより快々として憂愁に沈み味氣無き世を送るにつけ其母深く之を患ひて百方探索の上終に女の隱家を探知し、自ら赴きて訪ひけるに此女今は戀人に棄てられて世にあるべき様もなく、自殺をも企てむとする處なりければ、直に

引立て連れ戻りぬ。幾くもなくして貴公子は人手にかゝりて非業の最後を遂げたるにフェニガン自ら其嫌疑を蒙りて深く妻の恨む所となりしが、程もなく眞の下手人現れたるを以て夫妻の間既に一點の猜疑を容るべきにあらず、最後の一章に於て夫妻昔日の幸福を覺ゆ光風霽月の感を以て寺院に禮參りをなすに筆を收む。趣向は此の如く簡單にして波瀾極めて少なければ、勿論當年の傑著に比して遜色あれど、天才の靈筆なほ通篇に歴々たり、例へば *La Pardon Impossible* の章にフェニガ
ンが不貞の妻を容さむと欲するも、妻と吾との間に立ちて對手貴公子の姿顯はるゝ條愛情と嫉妬との争を寫し出で、妙を極む。又貴公子が日記の斷章を時々散見せしめたる用意は非凡にもまた周到なりといふ可し。吾人が此小説の女主人公を知るは全く此日記の斷章に基く。「まことに捨て難き風情の女なり。媚やかなる腰附、姿はすべて華

車風流にして、すねたる顔の高慢なるもうれしく、額は狭く形よく生へそろひて一點の難つくまじききはなりとあるをみては、世にはれもひもかけぬ孤兒院の軒などをかきしひたへつきを見るものかなと思はしむ。又 *マセフ、アンリ、ロスニイ* (一八五六生) の新作に *Renouveau* (1894) といふもの出づ。趣向は先年 *ツラの著* *パスカル* と同じく、老人が其子に對する慈愛の情を描出す。此人は世に *ゴンクウル* の流を汲めりと稱せらるれど、文辭冷刻に失し、獨逸風の談理、新熟語の晦澁なるもの多く、流暢明晰なる佛文の躰を失ふを以て非難せらる。文士筆を執て騷壇に起つや、各特色を發揮して新思想を吐露す可し。辭令嚴に先輩の蹤を履ますとも、幽妙の新機軸を出せる所あらば、單に其斬新なるを以て責む可からず、鬼才 *マラルメ* *Mallarmé* の如きに向て明暢なる常規の文を望むは非なり。然れども *ロスニイ* の文躰に至りては少しく生硬

にして音調に乏きを難じ得可く而も其勁健にして活氣を帯びたるを多とす。

巴里現今の事情に通じたるものは知る可し小説界にGymといふ女作者ありて健筆を揮ふとを。近作 *Leur Ames* (1895) は例の輕快洒落の筆法を以て佛國上流社會の生活を叙したり。紅燈綠酒、樂あり劇あり舞踏あり、粉黛の香ひ、芳烈の美酒に雜りて、黒衣白胸、燦爛たる黄金の軍服に、雪肌皓齒、黒眸の艶なるもの、金髮の麗なるを綴點す。此間錯雜せる人事の採て以て詩材とすべきもの少なしとせむや。吾邦の小説家を觀るに貴紳豪遊の境は漫りに鹿鳴館夜會等の慣用語を以て微かに其表面を略叙するに過ぎず、何ぞツップの聲に倣ひて縮紳の内情を描出せざるや。ツップといふは假の名、實はマルテル伯爵夫人(一八五〇生)家の名をミラポオといふ。革命時代の政治家が後裔なり。始より文界

に駢馳する決心はなかりしかど、嘗て或る遊獵の組に招かれ、歸て其紀行文を草し *Vie Parisienne* に投寄したるもの痛く公衆の趣味に適し意外の喝采を博したるより、編輯者の懇請黙し難く、再び筆を執て一篇の小説を物し、が爾後人望の盛なるを以て遂に文界に投ずるに至りぬ。其寫眞像をみるに愛嬌ある二重脣の如何にも輕快俊邁なる才女なり。容姿と著作と酷肖したるものか。この閨秀の傑作は *Autour de mariage* (1883), *Mlle. Eve* (1891) なり。

ピエール、ロテ、新著はバレスト、イナ旅行日記にして砂漠横斷の章最も秀た。星は靜に蒼空に羅ねて月は亞細亞一帶の地平線に上はる頃、張幕の假寐、夢結び難く、宏大崇美なる東方の夜に醒めては郷を忍び國を思ふ客愁も念頭に上らず、唯夢の如く幻の如く駱駝の鈴を聞きて鷄鳴バレスト、イナに入るといふに筆を止む。ロテは佛蘭西翰林院の人、千八百

九十一年オクタヴ、フイエエ(一八二一—一八九〇)の空席を生せしに當りてツラと競争して終に當選したり。著はす所 *Melanie Chrysanthème* 最も廣く行はる。ロテは戲號なり、本名を *Louis Marie Julien Viand* とす。千八百五十年一月十四日 *ロシユフォール* に生る。幼時學校に在る頃、同學の友が附けたる綽名を以て文界の雅號となしぬ。蓋しロテは印度産の草花にして綠草の間頭を潜めるしをらしき哀れのある花なり。十七才にして海軍に入り、久しく南海に遊びて、後支那海岸に轉戦する事數年、遠洋航海の途次能く外國の風俗人情を察して精細なる筆に寫したるもの、何時か藝林の珍賞する所となりし風流士官なり。人世の觀察に深刻なるはツラを優れりとすれど、思へば此人も才筆なり名家なり。

梨園の内情魂膽は何處も同じ事と見ぬ、雄志を齎して劇界の革新を謀

るもの蹉踏失敗は有勝の話なり。巴里の自由座 *Theatre Libre* といふは千八百八十七年の創立にしてアントアンといふ人之を統御し、屢々文壇に隠れたる天才を紹介して劇部の革新を促し、が、收支相償はず、金錢の累によりて此頃退きたりといふ。創立以來八ヶ年間に百五十人の新作戯曲八十種を採用して場に上せたり。其中五十九種は韻語を以てし廿一種は散文を以てす。此劇場は實は青年作家が民衆に訴ふる唯一の好舞臺にして數多の名曲、其中より出でしものあり。現に前記八十種の内卅二種は今猶佛都その他大陸の都會に於て演せらるるといふ。アントアンが眷顧をうけし作家中にはエミール、グラ、エドモン、ド、ゴンクウル、テオドル、ド、パン、非イユ、カテユル、マンデエミール、ベルヴラ、の如き今日の名流あり。又才藝ある敏腕の俳優にして、大器を抱きて空しく不遇を歎じたる者アントアンの爲に用ゐられて、令名を轟かし

しもの少なからず。「チオドフィエ座の Colas ルネサンス座の Argilliere 當時飛鳥を落とす勢の Nevisio 皆一度は「自由座」の樂屋入をしたる者なり。今や不幸にしてアントアン自由座より手を引きたれど、其主義綱領は尙ほ依然として存すれば佛の劇界未だ革新の氣を失へるに非らず。

カリエル Carriere

獨逸の哲學界に審美學の大家として有名なる民顯大學教授モリツ、カリエル氏は千八百九十五年一月十八日七十八歳の高齡を以て中風症の爲に逝きぬ。死に先つ一日常の如く校堂に上ばりて「ファウスト」の講演をなし、翌日は「ワルプルギス夜」の節を叙述せむと契りて歸へりしが、即夜病を得て歿せり。氏が絶筆は「獨逸評論記者に送りたる開書にして同誌二月分に出たり。近時獨逸政界の一問題なる鎮壓條例 Umsturz-

Vorlage に抗議して思想の自由を痛論したるものなり。著作の重なるは「Aesthetik 及び Die Kunst im Zusammenhang der Culturentwicklung 也。

マテウ及びバラスホス

詩人の逝きし者二人あり。一はプロブンスの詩人アンセルム、マテウといふ。年を享くる七十冬、千八百九十五年氷上に滑りて足を傷け、終に病を醸して帝郷に向ひぬ。華麗奔放一代の詩風を作して接吻詩家の名さへありし人なり。詩社を組みしもの初め七星、漸次光を收めて今や微に二星を殘す而已。他は希臘新邦の詩人アヒレフス、バラスホスの病歿なり。慨世愛國の詩多く往々雄健の調あるを以て國民詩人として尊敬せられたり。嘗て倫敦巴里の大都に遊び、道德の壞頽せるに驚きて嘲世の詩を作りぬ。「河に對ひて」「老ドラコス」「孤兒」等の篇人口

に喟矣す。叙事詩には「無名詩人」アルフレッド「リョヤ」等あり。詩篇全集凡て三卷千八百八十一年上梓せり。

(補遺) 新プロヴンス文學の研究者は Böhmner—Die provenzalische Poesie der Gegenwart, 1870. M. v. Szekiski—Die Litteratur der Ne-provenzalen ("Gegenwart" 1876, Nr. 35 fg.) を参照すべし。十九世紀初年に至て南佛蘭西の詩文急に勃興し、方言の詩人輩出せるを Jacques Jasmin (†1864) José Roumanille, Theodor Aubanel, Marquis et la Fare-Alais, Frédéric Mistral 等とす。是等奔麗の騷人相率ゐて Félibres の詩社を組み、以て南歐の新聲を唱へり。千八百三十年九月八日 Bouches-du-Rhône の Maillane に生れたる ミストラルは千八百五十八年 Miréio の詩を アフィニオン に上梓し、翌年佛譯を添へ巴里に發布したるより名聲頓に高く、爾後 Calendau (1867), Lis Iselo d'Oro (1875), Nerlo (1883) Le Poème du Rhône (1897) 等の作あり。

新希臘文學の参照書は A. R. Rangabé—Histoire littéraire de la Grèce moderne, 2 vol. 1877; Kind—Anthologie neugriechischer Volkslieder, 1861; Juliette Lamber—Poètes grecs contemporains, 1881 等なりしや。

セルフィン、イメイシ Selwyn Image

千八百九十四年、降誕祭に近づき發刊せられたるセルフィン、イメイシといふ新詩人の「カロール」數篇は、想象豊富にして興味深しとは既にいへり。この集は、短篇可憐の歌どもを蒐め、點するに眞摯人に逼る宗教の詩を以てす。咏する所は古來ありふれたる戀の物語、宗門の傳説にして靜なる生涯のきはのみを語り、用語聲調にも奇警の句を用ゐて世を駭かさむとする節なけれど、風韻自ら清楚脱俗の趣を具へ、絢爛ならずして優麗、先はヘリックの歌と類を同うし、姿優しく品高きはサクリングの流

を汲みて一段の沈静を具ふ。例を擧ぐれば *Amantium Irae* を題して

White Chloe lay sleeping

Under a beechen shade—

Worn with bitter weeping

For Daphnis, who had strayed

To woo another maid.

White Chloe fell dreaming

Of hours that once had been:

She felt the sunlight streaming

Across the forest green,

The dappled leaves between.

の如く聲調自然簡樸にして、情濃に幽趣の云ふ可からざるは、テオクリ

トスの昔は措て問はずとも、エルギリウスが牧詩に *Tityre, tu patulae recubans sub tegmine fagi* Silvestrum tenui Muscum militaris avena; (噫、ティイルス、君は蔭ひろき樗の下に横はり、織き麥の莖を吹いて野山の調を歌ふとある哀樂の調を寓し、降りては處女王朝の文學にグリーンダニエル等が唱道せし牧詩の姿を傳ふ。沈鬱凄婉の詩聲のみ流行する今日の文壇に此の如き歡樂と哀情とを雜へたる頌詩戀歌等の出たるは英文學の爲に悦ぶ可し。

イメイソが詩想は又他の方面に向て其才藻を發揮したり。宗教の傳説を歌ひ、祭典の莊麗を寫せしものには、雄健幽麗の二者を兼ね、間々熱情の抑ふ可からざるを見る。Good Fridayの歌は辭章自然にして而も雄渾の氣其間に飛躍す。

He hangs a dead corpse on the tree

Who made the whole world's life to spring;

And as some outcast, shameful, thing

The Lord of all we see.

は其一例なり。又 Canticum Beatae Mariae deiparae semper Virgini (生神母永
貞童女マリアに奉る歌)は聲調純雅にして變化乏しからず、歌ふところ
基督教中の最も幽麗にして諸人が崇敬と熱愛とを惹くものなり。

Mother of God on high!

We kneel at thy feet, dear Maid and Mother

Who hast borne us God for our very Brother.

Mother and Maid! we lie

Here at thy feet, who cry to thee, love thee

Praising none but the Lord above thee.

Mother of God's own Child!

We, who are called by His Name, belong to thee

We, thy children, chaunting our song to thee.

How may we pass alive

Through the desert worlds, but with thee, the Rose of it?

By thy fragrance stayed, till the dim, parched close of it.

一言以て此詩人が歌を評すれば、詩想奔放にして漸く沈靜の態を離れ
むとするに際し、美術家の本性は之に嚴格なる抑制を加へて、散漫の失
に陥らざるを欲して止まず。故に詩想抑へられむとして破れ、破れ
むとして抑へらる。妙は奇峭熾烈なる熱情を節するに典雅沈靜の風
調を以てしたるにあり。而も一言隻句の奇拔を望まずして、全篇の圓
満、壯麗を期したるは、英國近代の作家中稀れに見る所なるべし。

レスボス島の口碑傳説

抑も口碑傳説の研究は史學人類學に大裨益あるのみならず、往々詩歌の興味に富みて、あるものに於ては着想の奇古にして幽峭なる、他の傳に於ては性情の自然にして楚々人を動かす如き、會々秀拔なる詩人の琴に觸れて、雄渾なる叙情詩に發達したる者さへあり、近代比較參照の學風起りて、社會萬般の現象皆歴史を基として研究せられ、言語を比較するあり、文學を參照するあり、口碑傳説の如きも、いちはやく討究の題目に上げりぬ。先年希臘ミテレネ島の一土人ゲオルゲアキスといふもの、佛語を學ばむとして巴里に遊び、交を當時の名流詞客に結びたりしが、一日傳説研究に熱心なるレオン、ピノオ氏と會し、意氣大に投合して、終にレスボス島の口碑傳説を蒐集せむと約しぬ。ゲオルゲア

キス氏は歸國して隴畝の間に農民等が、俗謠傳説を探ぐり、ピノオ氏之を清妍なる佛文に譯し、今回巴里に於て上梓したりといふ。其書に載せたる目次を聞くに、物語、歌謠、俗説、神仙譚、禽獸譚、諷刺、子守謠、戀歌、格言、謎語、迷信等の類極めて面白く希臘民俗近代の思想を表はして、讀者の大に發明する所ある可しと。思ふにレスボスの風光は嘗てサッポオ、アルカイオスの琴絃に聲を移して、婉美なる熱情の詩歌を生みし所、假令民衰へ主代りぬども、春潮長しへに蘆荻の間に迫りて、萬古秀麗の碧空はなほ此土を掩へり。さればニムフェ、賊れサチコロスの跳りし所、自ら幽艶なる口碑を残しぬ。「巫女の魔鏡」といふ物語には、いともくわえかなる姫が深宮の廉影に、幾百年の久しきを眠るといふ筋あり。又謠曲羽衣の話に酷似せるは海に住むニムフェの物語にして、里の一少年に羽衣を奪れて通力を失ひ、終に意に従て婦となり子まで設けしが、一日羽

衣を取返して逃げうせぬといふ。天人に五衰ありと東洋にて云々
如く、羽衣を奪れて通力を失ふ事南歐の傳説に其類多し。 von Hahn's
Griechische u. albanesische Märchen Leips. 1864 (No. 83), Gosenbach's *Sicilianische
Märchen* (Vol. 1, P. 31) Schneller's *Märchen aus Wälschland* (P. 73) 等に同一の物
語見ゆたりと云ふ。或人は之を亞刺比亞より傳はりし物語ともいへ
り。又レスボスの傳説中、流水の傍に眠り野中の一本杉などに休む事
の極めて危険なる事を説けるあり。これ碧潭にはぬしあり、老樹には
精ありて、間々人間に害を加ふと云ふ迷信より來りしものにして、幾分
か東洋にも類似の點ありと覺ゆ。禽獸談の内にては鷓鴣と龜との話
最も面白ければ、左に掲ぐ。

今は昔、禽獸の類も學校に兒童を送りて正午に辨當を運びし事あり
しが、或日鷓鴣の母、己が子に食物を持行かむと思へども、閑なくして

困切りし時、幸ひ隣の龜が同じ用にて今出行かむと見るを見て、もし
れ隣の龜さん、今日は眼のまはるほどいそがしくてなりません、何
卒、憚りですがお序でにこれをうちの小さいのに届けて下さいませ
かうやつてお隣同士にしてゐませば、何日か御返禮も致しませうと
いへば、れ龜は答へて、決して御遠慮には及びません、お、持て参りま
せうとも、しかしまだよくあなたの御小さいのを存じませんのでと
いふに、なに、學校へ入らしつたらば、すつと御見渡しになつて、一番奇
麗なのがうちのですと無造作の答なり。お龜はこゝに辨當を受取
て學校に行きしが、戸を開けて右を見、左を見れば、わが子に優る標致
を見ず。遂に己が子に鷓鴣の辨當をも與へて歸りぬ。されば残り
の兒童は指を啣へて羨ましがりぬといふ。
猶此他、長くなればなる程短くなるもの何に、命などいふ謎もあり、猫が

手水を遣へば雨降るといふ傳説等我が國の俗傳に似たるものあり。
傳説研究の興味斯の如し。

(補遺) 神話、傳説、口碑、俗諺、迷信等を研究する Folk Lore 學は歐州各邦の學者間に熱心の研鑽を受け、學會著作の類頗る多し。例へば英に千八百七十八年設立の Folk-Lore Society ありて Folk-Lore Record, Folk-Lore Journal 及び千八百九十年以降倫敦刊行の Folk Lore を佛に Société des Traditions populaires ありて千八百八十六年以降巴里刊行の Revue des Traditions populaires を機關とす。其他獨逸には J. Grimm, A. Kuhn, W. Mannhardt, W. Schwartz, R. Köhler, F. Liebrecht 等の跡を享けて K. Weinhold 専ら斯學を修め、其編纂に係る Zeitschrift des Vereins für Volkskunde は千八百九十一年以來柏林に於て刊行す。又伊太利亞には Archivio per lo studio delle tradizioni popolari (Palermo, 1881 年) 白耳義には Bulletin di

Folklore (Bruxelles, 1891 年) 丁抹には Dania (Kopenhagen, 1890 年) あり。

クロムエル塑像の詩

クロムエルが雄圖大業今更説くも無益なり。只にミルトンが任へたりし政治家としても、文學家が注意を惹くに足らむか。然るに千八百九十五年六月十七日英國下院に於て、政府の提出に係るクロムエル建碑の議案は少數を以て終に否決せられたり。詩人スフィンバアン之を聽て大に憤り、熱情雄邁の本性として默視するに忍びず、直に筆を執て一篇の詩を作り、同じく廿日「十九世紀雜誌」に寄せたり。破題直にクロムエルの功徳を頌す。

What needs our Cromwell stone or bronze to say

His was the light that lit on England's way

The sunlawn of her time-compelling power

The noontide of her most imperial day?

His land won back the sea for England's dower

His footfall bade the Moor change heart and cover

His word on Milton's tongue spake law to France

When Piedmont felt the she-wolf Rome devour.

スヰンハアンがクロムエルを歌はむとするや不知不識ミルトンに憶
ひ至りしなるべく随て其詩の冒頭が、ミルトンの沙翁を讀みし歌に似
たるも怪ひに足らず。殊に前記の最終行は、吾等をしてミルトンの「ソ
ネット」第十八、

Avenge, O Lord, thy slaughtered saints whose bones

lie scattered on the Alpine mountains cold;

及び同十六、

Help us to save free conscience from the paw

Of hireling wolves, whose Gospel is their maw.

又「リシダス」第二百二十八行 *the grim wolf* の故事を想起さしめ、名家が古典
をまねびながら、單なる模倣に陥らざる詩才の程を窺はしむ。讀者は
また、スヰンハアンがこの詩に用ゐたる韻律の *aaba; bcbh...* なる事に
注意し、以て彼が押韻に巧みなるをも知り給ふべし。此詩素より咄嗟
の作にして、彼が詩才の最高所を窺ふに足らずといへども、名家の筆の
跡は假初なるすさびにても自ら雄渾なり。

シャルズナルス名歌の替歌

メアリン府トリニティイ大學の某氏がものしたる、シャルズナルスが絶唱

を作り替へたるものあり。これは頃日出版したる英の文士 Thompson の詩集に、羅句語より新に製造せし生硬の歌詞多きを以て、暗に之を嘲けりしものなり。某曰く古來の名什絶唱も其通俗に過ぐるを以て、時を經るに従ひ、漸く廢語となりぬ、今 illuminate and volute redundance の詩人騒客を満足せしめむ爲に、一例として ラルズ ラルス の名歌をかき直したり。此の如くにして今人の耳に入り易き替歌數多を作り得べしと、擲揄翻弄の調あまりにをかしければ此替歌を掲ぐ。

十四

By founts of Dove, ways incalculable

Did habitate

A virgin largely inamable

And illaudate.

A violet by a muscose stone,

Semi-occult

Formose as astre when but one

Ostends its vult.

She lived incognite, few could know

When she ceased

But O the difference when, lo

She's tumultated.

一十四

(補遺) 替歌擬似詩に嗜好ある人は W. Hamilton's Parodies of the works of English and American Authors を繙く可し。

文學史の著述

西歐の詩文を玩賞して、其妙趣を味はむと欲する者は、先づ其文化の淵

源を探り、國民の特性を熟知し併せて思想變遷の潮流を追はざる可からず。英文學といひ、佛文學といひ、獨逸文學といひ、將また伊太利亞、西班牙の文學と雖も、皆希羅古典の傳統を承けたるものなれば、ホメロス、エルギリウスを知らざるものは、終に是等文學の眞髓を了解するに能はざる也。又近世に及で各國皆異りたる歴史を有し特殊の性格を發揮し來れるに至りても、相互の關係影響は終に免る可からず。始め文藝復興の機運に乗じて、伊太利亞に美術、文學勃興し、其婉美華麗なる風は靡然として全歐を傾けし時、英吉利の敬虔も其感化を蒙りて、一層豊麗壯大なる萬古の風流を作りぬ。然るに其漸く衰て放縱隗奇に陥るや、佛蘭西の莊重典雅之に代りて健全の發達を遂げ、當代の文華終に西歐の好尚を支配したり。獨逸の如きは全く此華麗莊重に眩惑して摸倣これ事とし、從て天才の暢達なる發展を妨げしかば、沙翁オシアン

の研究熱より起りたる國民文學蔚然として興り外國崇拜の風を國外に放逐したり。されば單に一國の文學を學ばむと欲する者も亦略其世界文學に於ける該文學の關係位置を知ると必要なり。この故に討究倦む事知らざる獨逸の學界には、世界文學史の著作あまたありてステルン、シユエルの著世に行はる。然れども吾等はカリエルの大著 *Die Kunst im Zusammenhang der Culturentwicklung* を以て此種の書の秀拔なるものと思考す。

この夏倫敦マクミラン社はコウトホオプ氏英國詩史の初卷 *A History of English Poetry*. By W. J. Courthope を發兌したり。未だ該書に接せざれば勿論その詳細を知る可からずと雖も、傳ふる處に據りて畧其梗概を窺ひたるに、着眼見識大に吾等の心を得たり。著者が斷論品評の著實なるは、既に先年マクミラン社出版英國文人傳中アディソンの評論に親

知りし所なり。今回出版の第一卷に於ては英文學の起原に筆を起して、チオサアの世を叙述し、處女王朝の文學が將に興らむとする處に筆を留めたり。中世を通じて終に泯滅せざりし古代文化の痕跡を尋ねて、文藝復興の萌芽を逸早く看破したる評眼は、よく近代史學の結果を收め、故フォルター、ペイターなどの唱道したる所を敷衍したるものといふ可し。一見急激なりと思はるゝ變化も、實は一朝一夕の事業に非らず、其胚胎せし事實は遙前代に存す。新思想は起るべし、新詩形も生ずべし、音律は變り好尚も改りぬ可し。されど美術の發達は革命にあらずして常に進化なり。この故に英吉利の文學に於ては、祖先アングロサクソンの遺韻數多しと雖も、此國も亦文明世界の一部として、古來文化の傳統を承けたり。羅馬教の感化、希臘文化の遺韻、武士道、中世の歌物語、羅馬帝政の名殘、僧侶の學藝保存、文藝復興の萌芽、國民的精神の勃

興等、凡て是等の文物よりして、かのチオサアは生れぬと著者の斷論したるは賞賛すべき見識なり。又、バラッドを以て無意識なる國民の發情となさず、却て之を意識ある詩人の製作としたる著者の新説は幾多の反對あるべけれど、全く根據なきともあらず。ともかくもコオトホ オア氏の著述は近時の好著にして、材料の精確、評隲の穩當なる共に在來の著書を壓倒して餘りあり。クレイク、シオア、アノルド等を誦したる時代は過去となりぬ。今や亦テエマの英譯を翻して、漫然英詩を評隲し、沙翁、ハIRONを喋々する時代にもあらざるべし。英吉利古代の文學史にはブルカアあり、テン、プリンクあり、漸く近世に入りては、マクミラン社出版のブルウク、セイント、ペリイ、ゴッスの著あり。浩瀚の書に非らずと雖も、簡勁明潔、優に當代詩文の發達を窺ひう可し。吾は世の英文學を研究する人士に大言壯語の評論を廢することを勧め、實着な

る原文の講究に心を潜めて、堅固なる智識の基礎を得る方に勉められ
むことを望む。

又近着の雑誌をみるに英國に於て各國文學史の出版せらるべき豫告
二件を載せり。一はセイレンツベリイ氏の編輯する所にしてブ
ラックウ
ウド會社より出で *Periods of European Literature*. といふ。其目次は左の如
し。

The Romantic Revolt Edmund Gosse

The Romantic Triumph Walter H. Pollock

The First Half of the 17th Century H. D. Traill

The Dark Ages Prof. W.P. Ker

The Transition Renaissance David Hannay

The Augustan Age Oliver Elton

The Later 19th Century George Saintsbury

又ハインマン會社より發兌せらるべきものは、ゴッス氏の編輯に係り入
拆三百五十頁の冊子なり。

French Literature Edward Dowden

Ancient Greek Literature. Gilbert Murray

English Literature. Edmund Gosse

Italian Literature Richard Garnett

Modern Scandinavian Literature. George Brandes

Japanese Literature. Basil Hall Chamberlain.

最後に見わたる チェムバレン 氏の日本文學史は吾等が一日も早く讀ま
むと欲する所なり。知らず、日本文學は如何なる形を以て世界の文壇
に紹介せらるべきか。吾邦上世中世の文學に就ては略定説ありて、叙

述評論もさまざまで困難ならざれど、近世徳川時代の文學を論じ、また今代文學の形勢を叙せむとするには、史眼炬の如くにして、批判の力また精妙なるを要す。吾等は刮目して日本文學史の出づるを待たむ。

〔補遺〕 ハイネマン社出版の文學史は其後續々發刊して上記外尙數種を加へ既に吾邦へも傳來せり。而して日本文學史はチェムバレン氏に代てアストン氏筆を執りぬ。

史家ジイベル

獨逸建國の歴史家として名聲歐洲に洽ぬルウドキッヒ、フォン、ジイベル Ludwig von Siebel は千八百九十五年八月一日令息ハインリッヒ、フォン、ジイベルをマルブルフの家を訪ひたる時、急に病を獲て逝去したり。

氏は千八百十七年を以てデニッセルドルフに生れ、長して伯林に遊學し、

ランケの門に入りて史學を修めたる後、暫らくボン大學の助教授なりしが、四十五に至りマルブルフ大學に聘せられて、史學の講座を受持ち、又政界の運動をも試みて、エルフルトの議會にも列席したり。此間の著述には第一十字軍の歴史あり、又 Geschichte der Revolutionszeit (1789—1800) あり。特に後者は當時獨逸聯邦の連合未だ成らずして稍もすれば革命内亂の破裂せむとする如き政界の形勢に感じて、稿を起したるものなり。其後氏はハヴリヤに行き、民顯に移り、又ボンに歸りて、政事に奔走したる間にも、大學に在て史學の教授を怠らず、始めは比公の非立憲的政界に反對したりしが、六十六年の役に於て全く比公の黨派に移りて、七十六年には普魯西アルヒヴの管理長に任せられたり。爾後外交文書の冊卷の裡に在りて、史料の整頓編纂に従事し、今日に至る迄上梓したるもの六拾卷に及べり。氏は獨逸史學近代の學風に似合す、多少

文章に注意したれば文跡雄健にして趣致を具ふ。其大著述 *Begründung des deutschen Reiches unter Kaiser Wilhelm I* は猶一卷を餘したれど既に脱稿して訂正を経たりといへば近きに上梓せらるるを得可し。 *Monumenta Germaniae Historica* の編纂者を失ひたるは眞に惜む可しと雖も、なほ獨逸建國史の完成せらるべき望あるはせめてもの慰なり。

ホメエロス學の新説

希臘古代史を繼て所謂英雄時代を研究し、ホメエロス二大叙事詩を窺ひたる人は、此詩の起原發達傳唱等に就て幾多の複雑したる學說あるを知る可し。ゾルフが其有名なる「プロレゴメナ」 *F. A. Wolf—Prolegomena ad Homerum, Halle, 1795* に論争の端緒を開きてより、爾來西歐古典學の壇上に此問題の論議絶ゆる時無く、獨逸の學者は特に深奥なる研究を積

みたり。 *Paul Oauer* の近著 *Grim Fragen der Homerik* (Leipzig, Hirzel) の如きは、實にホメエロス學に於ける獨逸新派の學說を代表す。抹殺破壊の批評既に其頂點に達し、今や漸く調和建設の時代となりて、青年學者の間往々見識高く素養豊にして、優に斯學老儒の墨を摩する者あり。カウエルの如き未だ春秋に富める學者なれども、既に「イヤス」オデッサイヤ」の批判に於て令名あり、且は希臘碑銘、羅甸文學に關する良著ありて、新派中の錚々たるものなり。獨逸學者の弊はあながちに専門に走りて全局の大勢に通せず、終に詩文の精神、文化の潮流に暗きが常なれど、カウエルは之に反して、單にホメエロス詩の發達を究めむとするにも、原文批判は勿論、方言、歴史、文化、宗教の汎きに亘りて毫も倦まず、加ふるに論難の銳鋒當り難く、保守學者にはルウド、非ッヒ、急進學者には非ラモ、非ッ」の徒に向つて戰を挑める氣焰盛なりといふ可し。今カウエルが

新説の梗概を左に摘記せむ。

カウエルは所謂結晶説を取れり。例へは叙事詩「イリヤス」は始め數篇の核ありしも、種々の傳説之を中心として漸く結晶し、終に今日吾等に傳りたる全篇を組織したるものとす。而して此中心の核たりしものは、「イリヤス」第一卷及び第十一卷乃至第十六卷にして、彼の「パトロクロ」の墳墓に犠牲を供する如きも、此原説の中なる可しといふ。斯説の如きは既に從來ホメエロス學者の唱道せし所にして、敢て珍らしからざれども、カウエルは舊派の人と共に、此等の核を解剖分析して、精密なる區別を爲さむと企つるものにあらず。彼は之を以て到底徒勞なりと思考す。

カウエルの説に據れば、ホメエロスの叙事詩はアイオリヤ殖民地に起り或は少なくとも、此等の殖民者が、故國「テッサリヤ」より持來りし詩材より發達したるものなりといふ。彼は又トロイヤの圍を以て史的事實なりと認むれども、希臘本土よりの遠征ありしことを信せず。たゞ昔アイオリヤ人が故國を離れ、レスボス島及び對岸一帯の海濱に擴がりし時、漸くトロイヤ附近の地を略して、幾百年の争の後終にトロイヤ城を陥落したるものとす。此等競争の歴史はホメエロス叙事詩の後景を形作るものにして、此叙事詩中古代の作なりと思はるゝ部には、單に攻城を叙して、陥落を賦せざるにても明なりといふ。

カウエルは又「フリルト」ペロポネソス説を同じくして、此等の叙事詩を作りたる人民の故國を「テッサリヤ」ポイオティアと定め、ペロポネソスと關係を有せしめず。此詩原始の形にては、「アガ멤ノオン」は「テッサリヤ」の一侯伯なりしが、後世叙事詩を賞する事「イオオニヤ」の手に渡りて、漸く「ペロポネソス」に遷され、終に「ミケナイ」の王となりぬと論定したり。

この極て斬新なる學說に基礎たるもの大凡そ四條あり。

第一、若しアガメムノオンにして、アヒリウスの如く、原始傳説中の人物ならしめば、是非とも狹義に云ふアイオリヤ語の行はれたる地方より來らざる可からず。而して此語の行はれたるはテッサリヤにしてペロポネソスにわらず。

第二、アガメムノオン及び其艦隊はアウリスの港より船出しぬ。これ明に北希臘を指すにわらずや。又、イリヤス中にアルゴスアカイヤの二語屢々互に代用せらるゝを見れば、此二地方は接近したる隣邦ならざる可からず。然るにアヒリウスの率ゐたるアカイヤ人は南テッサリヤに住す。故に「イリヤス」に所謂アルゴス人はペラスゲル、アルゴスの事にして、北テッサリヤの平原に住せし民なり。

第三、*ἵπποβοτοῦ* (馬を生ず)といふ枕辭は北アルゴスにのみ應ずべく、決し

てペロポネソスの都府に適せし。

第四、*καὶ Ἐλλάδου καὶ μέσσω Ἴσχυρος* の句は素テッサリヤの二郷を指しれど、オデッセイヤに於ては漫然と希臘全土を意味するが如し。今ホメエロスの二大叙事詩を通じて、アルゴスなる語義の變遷を尋ねて其意味の漸く擴がる所を究め來るに、原始の形に於ては、アガメムノオンとミューケナイとの關係極めて弛し。メネラウスとスパルタとネストオルとピュロスとの關係も亦然り。

以上カウエルの新説は未だ輕々しく可否を斷じ難けれど、ホメエル學に資する所少からざる可し。

大辭書の出版

吾國に於ても言語學の機運漸く熟し、音韻文法の研究次第に盛ならむ

とするに際し、辭書編纂の急務既に識者の間に認められ、社會の注意も亦此點に傾き來らむとす。「言海」ことばのはやし「日本大辭林」「大日本大辭書」の出版は皆此需要に應せむ爲なる可く、又今日新派の旗幟を立てて言語學界に勢力を張り來りし人士の中にも既に少からぬ研究の結果を蓄ふるものあらむ。此頃佛國に於て歴史的方法に據りたる良好の辭書新に出版せらる。吾國今日の言語學者たるもの之を參考して、他日編纂せむとする辭彙の模範ともす可し。 *Dictionnaire général de la langue française du commencement du dix-septième siècle jusqu'à nos jours. Par Ad. Holtzfeld et Arsène Darmesteter, avec le concours de M. Ant. Thomas Vol 1. A-F (Paris, Delagrave)* は有名なるリットレエ佛語大辭書の省畧なりとか。極めて謙遜なる編纂なれど、經營苦心の程を察しても、又其結果極めて秀抜にして、リットレエに優る所をさく少からざるを見ても、確かに近著辭書

中にて屈指のものなり。早く千八百七十一年の比より着手し、ホッフエルド氏は言語、語例の撰擇、定義、分類等を擔當し、ダルクムステテル氏は羅曼文獻學の大家なれば、むねど語源、言語史の部門に専任したり。千八百八十八年不幸にしてダルクムステテル氏死したる時には殆ど編纂を終り、印刷に着手して、校正の際所々の空處を充たし、前後の調和を計りて全卷の一致に注意する迄に運びたり。其時古代佛蘭西語に精通したるアントアン、トマス氏新に加はりて益々此辭書の價值、長處を増加したり。元歴史的方法に基きたるものなれば、語毎に先づ第一に其最古の意義を附し、加ふるに語源を以てし、それより年代に従て其語の種々の意義用例等を示せり。これリットレエと異なる所にして、リットレエは語源的、歴史的などの符號を附して種々の意義を列記し、近世普通の意義を先きに出せり。されば通常の場合には便利の如く見ゆれども、

實は歴史的方法の設計に背きたりしが、今回の新著は嚴しく史的排列法を操守して、近年英國言語學會編纂マレエ氏等の英吉利新辭書を參考したる所もあり。マレエ氏の辭書も同じく歴史的方法に基けるものにして、蓋し近世の大著述なり。未だ完結に至らず、吾國に到來せるもの稀なる可し。過日出版せられたる部にてP迄達せり。此書を *A New English Dictionary on Historical Principles*. Edited by Dr. J. A. H. Murray and Henry Bradley (Oxford, Clarendon Press) 云々。

(補遺) 辭書編纂に關して参照すべき書籍多かるなかに、われはまづ *Littéré—Comment fais je mon Dictionnaire?* を勧めて語學者の氣魄を盛ならしめむと欲す。

羅甸文學の評論

近歐文化の真相を會得せむと欲せば先づ其源流なる希臘羅馬の古代に遡らざる可からずとはわが居常唱道する所にして、特にかの伊太利亞半島に發達して羅馬帝國の擴張と共に全歐、西亞、阿非利加に行はれたる羅甸語は、詩文、宗教、哲學、科學、法政に極めて親密なる關係を有し、西歐文化の研究者が決して廢すべからざる國語なりとす。先づ例を佛蘭西文學に採りて言はむに、ホラティウスを知らずしてポアロオの妙趣を會得し得べきか。セネカを讀まずして路易王朝の劇詩を味ひ得べきか。英文學に於ても、プラウトステレンティウスの感化極めて明瞭にして、ドライデン、ボウプ等の精髓は、羅甸文學の對映を以て始めて穿得べきものなり。頃日マクミラン社より羅甸詩歌に關せるタアレル氏の講演數篇を集めたる *Latin Poetry* by R. V. Tynnell を出せり。これは先年氏がショアンス、ホプキンス大學の爲に講じたる評論にして、精確なる

語學の智識と細緻なる批評の卓見と相待て此書之美を成せりと云ふ。羅甸文學自らの研究に裨益する所ある可きは勿論、西歐の詩歌を味はむとする者の爲に良好の参考書なる可し。而して此書の特色とも云ふべきは、叙述の間、巧に近歐文學の例證を引きて、羅甸詩歌の精神と對照せしめたる事なり。例へば論理と詩歌との微妙なる契合を説明する爲にルクレティウスの「物性論」とテニソンの「ふたつの聲」とを比較したるが如し、又カトールルスの戀歌を評論して其熱情を説明し盡したるも、慥かに再三讀の價值ある可し。

然れどもエルギリウスの條に於て單に「アイネイス」を論じ、オキデウスの爲に只僅に數頁を費せし如きは、割愛に過ぎたりと云ふ可し。「農歌」に、田家年中行事の委細を精寫したるものは羅甸詩歌の特調ならずや。又は「牧歌」に牧羊の風流を歌ひて、淳雅の俗を寫せる如き、假令テオクリ

トスには遜色ありとも、聲調の優雅なる景物の婉美なる世界文學の珠玉なる可し。又オキデウスの「變形詩集」は古典神話の寶庫にして後世の詩人之に就て其詩材を選びし者頗多く、フレモンパウキスの物語は英佛の詩人に因て屢々繰返され、フロメエラの哀なる傳説はマシウアアノルドスギンバアン等の詩想を鼓吹し、其他伊太利亞西班牙の文學に著るしき感化を及ぼしたる事疑ひ無きに、タアレル氏が評論を此詩人に咨みしは、遺憾なりと云ふ可し。ホラテウスに關する氏の評論は通俗の定論と説を、異にしたれども、近代古典學者の唱道する所と同軌の論なり。昔よりホラテウスは多數の愛讀者を有して、抒情歌の詩才あると共に、沈靜にして雅健なるを以て賞せられしものなれど、今代の學説は漸く彼の真相を看破し來り、眞摯の氣に乏しく、稍人生を弄びし如き蹤跡ありて、其戀を語り情を述ぶるも畢竟一時の逸興に過ぎざる

を認めたり。是に於てカタアレル氏はホラティウスを古來の光榮ある座より下して憚るとなかりき。然れども、典雅なる詩形の内に簡潔なる思想を盛りて、聲調婉美を盡し子音の措置、母音の配合に留心したる妙技に至ては、永く後世の賞歎を惹くに足る。人生の峻巖なる實事に對して終始遊興の意を失はず、花はこぼれ戀は移るふ、ともにこれ琴聲に添ふ幻に過ぎずと天賦の詩想を演じたるは此詩人の真相なり。秋の海の險惡なるに戀人の船出を危みエウロオバを引きて

Nuper in pratis studiosa forum et

Debitae Nymphis opifex coronae

Nocte sublustri nihil astra praeter

Vidit et undas,

「*foras*」には野に出て、花を摘みニムフェのために環を作りし身の、今ははの暗き夜に星と波とを見るのみと歌ひたる如きは詩的直觀の醇なるものに非らずや。而して彼は熱情の奔流を抑制して、平淡を期し、爲に詩歌の本領を害して、年少の讀者が熱慕を受くる事能はざれど、却て此點を以て老成平穩の人に愛讀せらる。彼の思想はあながちに深奥ならずども、世故を経たる圓熟の域に達して、寛容豁達の域に在れば、中年以上の讀者を悦ばすに足れり。

ワトソンの新詩集

ワトソンの詩は高雅婉麗にして節制の美德をそなふ。而して此莊重老熟の調は過度を厭ひ、放縱を忌む英國人の趣味に適合したれば近年に及び此青年詩家を愛讀する者頗る多く、評家も亦口を極めて其美を

摘發指教するに吝ならず。「スペクテイター」のハットン氏の如き最も熱心なる賞賛家なり。されば又一方に於ては多少反動的批評の聲無きにもあらず「土曜評論」の鋭利なる筆法は、先頃の紙上に於て「小詩人ワトソンの項を設けて、其未だ第二流の詩人なる事を論破し、之に天才の榮譽を興ふるを欲せざれど、格調慎重にして、往々雄渾の域に達する事實に至りては否定すること能はざるに似たり。吾等はなほスキンハア、モリスの二人を以て英國現代の二大詩人とし、又全歐の詩星中光芒最も炳乎たるものと思考すれども、先年公にせられし「ラルズ」墓畔の歌または其後前の桂冠詩人テニソン卿を悲みたる挽歌「詩神の涙」又「シムエ百年祭」等のワトソンを讀みては終に此新詩人が典雅の格調に感服せざるを得ず。邦人の英文學に云々する者は必らず一讀すべき詩人なり。頃日新作數篇を集めて上梓せり。 *The Father of the Forest*

and other Poems. (London: John Lane) 1895 ㄷ ㄱ ㄴ.

此書の標題となりし詩は、未だ曾て雑誌新聞等に掲載せられざる新作なり。水松の樹の下に詩人が大英國の越方行末を沈吟したる長篇にして、二部に分ちたる第一章には極めて簡潔なる語法を以て、英國數千載の歴史を略叙し、第二部に水松の精が、詩人に答へて英國の將來を豫言する所風調頗るテニソンの遺韻あり。此の他「ハアンス」百年祭に咏じたる「ハアンスのれくつき」は衆口の齊しく稱賛する所たゞ數行の弱處ある而已。「アアメニヤ」に於ける「土耳其人」は「ミルトン」の高調を曳て玲瓏雄渾なる「ソネット」なり、簡潔にして餘蘊なき詩體の例を擧ぐれば

“Ah, thou hast heard the iron tread

And clang of many an armoured age,

And well recall'st the famous dead,

Captains or counsellors, brave or sage,
Kings that on kings their myriads hurled
Ladies whose smiles embroidered the world.

* * * *

“Rememberest thou the perfect knight,
The soldier, courtier, bard in one,
Sidney, that pensive Hesper-light
O'er Chivalry's departed sun?
Know'st thou the virtue, sweetness, lore
Whose nobly hapless name was More?
* * * *
Or Eleanor's undaunted son

That, starred with idle glory, came,
Bearing from leaguened Ascalon
The barren splendour of his fame,
And, vanquished by an unknown bow
Dies vainly great at Fontevrand.”

(The Father of the Forest)

卷末の「辨難」はワトソンを徒に前人の摸倣家なりと誹りたる評客、特に「土曜評論」の記者に答へたる所にして譬喩例證頗る警句に富む。

カストロ及びエチエガライ

南歐葡萄牙の地たる、熱情氣鋭の人民を生ずるに適し、隨て其美術文學には奔放艶麗なる趣頗多く、之を北歐の深刻峻嚴なる文辭に比するに

殆ど別天地の思あり。然るにカモオエニス Camões (1525—1579) 逝て茲に三百有餘年 Os Lusitans の雄渾絶美なる潮音香として終に聞く可からず。近世に至りて僅にカプリリオ Camalho (1810—1877) の愛國歌又はブラザルの詩客デアス Gonçalves Dias (1823—1864) が幽婉なる望郷の詩に椰子の葉、薩比亞鳥の聲を歌ひたるなど、少しく復興の氣運に向ひしが如くなれど、これを英佛近代の詩文に比して顔色無からむとす。しかるに輓近に至て青春の詩客漸く頭を擡げ、南歐思潮の特色を發揮し來らむとするは大に喜ぶ可き現象といふ可し。エウジニオ、デカストロ Eugenio de Castro といふ厭世詩人の戯曲近時コインブラ府に於て出版せられたり。時代を古代以色列の盛時に置き聰明を以て當年の奇觀と稱せられしサバの女王ベルキスが心裡の争鬭を描出するを以て一篇の大主意とす。南亞細亞の熱烈にして而も夢幻の如き氣候に生育

したる女王は紅閨翠帳の裡、遙にソロモンの深智聰明なるを傳聞し、これより輾轉反側の情殆ど禁す可からず、終に意を決して供奉數千、華奢を盡して以色列に登りソロモンが款待を受け、親交を結び、一轉して紅涙萬斛の悲運を齎らして歸國す。夢幻奔放忽にして艶妖眼を眩じ、忽にして悽愴心を寒からしむる多彩絶美の妙趣は、南歐の詩人にして初めて能くし得る所、而も東洋文明の感化數百年の久しきに亘りたるレネエ半島裡に於てのみ、斯る作品は創造せらる可きなり。其他牧歌抒情詩の類に名作多く、Tinesias, Ouristos, Horus, Saphiru, の諸篇共に美術的完璧なりといふ。カストロは哲學に於てシャモンハワアの感化を享け美術の趣味に於ては近世 Symboliste の奉ずる所に傾けり。其派を稱して Nephelabatos といふ。又近時英語に翻譯せられて島國の文壇を動かし、イプセンの後、文學の

流行は、この詩人に移る可しと迄噂せらるゝはエチエガライ Echegaray (一八三二生)の戯曲なり。El Galeoto (1881)の如き最も賞讃せらる。實に葡萄牙文學の漸く歐洲に翫賞せられ、新進の詩人輩出し來れるは争ふ可からざる事實にして、其他一般に南歐文學の研究日を追て隆盛に赴き、既に先日グリルバルチェルとロペデエガとの關係を詳論したる著述を見たり。而してダンテに至りては之に關する著書汗牛充棟、歐洲諸國所としてダンテ學會の設立を見ざるはなく、皆熱意此大詩人を研究して倦まず、此等篤學の士の勤勉努力は先日珍書の發見に因て酬ひられたり。そは *Questio de Agui et Tarru* 一本をベルウツヤに於て發見したる事なり。抑此書がダンテの作なるや否やに就ては學者間に議論一定せざれど、兎に角現存の部數極めて少なく、今日僅に五部を存するのみにして其内一本はブリテッシュ、ミウツイアム、圖書館所藏なり。

(補遺) José Echegaray は千八百三十二年マドリッドに生れ、土木の術を修めて、政府の爲に經營する所あり、漸く累進して千八百六十八年、七十二年前後二回大藏大臣の綬を帯びたり。然れども今やかれが詩人としての天爵は全く他の榮譽を壓せり。著作の劇詩頗る多く、皆劇部に演せられて全都の喝采を博しぬ。「復仇者の新妻」(La Esposa del Vengador)「終の夜」(La Ultima Noche)「劍頭」(En el Puño de la Espada)「始終」(Como Empieza y Como Acaba)「狂か聖か」(¿Locureno Santidad?)「めばねの評家」(Un critic incipiente)「言はれぬこと」(Lo Que no Punde Decirse)「岸なき海」(Mar Sin Orillas)「死の胸」(En el Seno de la Muerte)「大ガレオト」(El Gran Galeoto)「二筋道」(Conflicto entre Dos Deberes)「樂しむ命悲しむ死」(Vida Alegre y Muerte Triste)「平凡中の崇高」(Lo Sublime en lo Vulgar)等の作には皆峻嚴なる倫理觀ありて素地を爲し、元より厭世の傾あれど、かの徒に涕

泣し、漫に怒號する類にあらで、悲壯の感横溢すと稱す。

Antonio Gonçalves Dias は伯刺西の人なり。千八百二十三年七月十日を以て南米マラニオン Maranhão のカヒヤス Caxias に生れ壯くして葡萄牙に遊び、法醫の二科を修め、歸て政府に仕へ、復た歐洲に遊びぬ。千八百六十二年肺を養はむとて三たび歐洲に赴きしが、既にして歸航の途次、病革りて歿せり。著はす所、Primeiros cantos (Rio de Janeiro 1846) Segundos cantos (1848) Ultimos cantos (1850) 其他劇詩數篇、及び未完の一叙事詩あり。然れども Canção de exílio 無限の憂愁景慕を湛へたる歌最も人口に膾炙す。

南米文學の参照書を擧ぐれば先づは Ferdinand Wolf, Histoire de la littérature Brésilienne, Paris, 1863 に指を屈す可なり。Charles Dudley Warner's Library of the World's Best Literature. vol. XV. 中 M. M. Ramsay's Latin-American

Literature 及び Marcelino Menéndez y Pelayo-Anthologia de Poetas Hispano-Americanos 4 vol. Madrid 1893-1895 亦よし。

獨逸の女詩人

千八百五十四年八月三日 Bayreuth bei Rugmit 一寒村に生れ、教育としては單に新聞雜誌の類より得たるに過ぎざれど、一躍して全獨逸の文界を驚かし、漸く歐洲騷壇に知名の詩人となれるはヨハンナ、アムプロオシウス Johanna Ambrosius なり。聲調自然にして讀者の真情を動かし、悲哀薄運貧窮困厄の裡に能く天命の歸趣を認知して、冀望信仰の念益篤きは此女性詩人が齎らしたる福音なり。ドレスブルフの Dr. Schrullen 教授が始めて其詩才を看破し、數年前の基督降誕祭に、此女詩人の詩歌數篇を編輯して上梓したるに、名聲直に喧しく、三月ならずして既

に四版を重ね、今や第七版を發するに至れり。聞く處に據れば獨逸皇
后は之に年金を給ひ家屋を興へて隴畝の間に天京の詩想を發揮した
る此女性詩人が晩年を慰藉し給ふといふ。かれ今 *Gr. Versmählchen*

b. *Leselernen* に住す。

(補遺) ヨハンナムプロオシウスの詩は東普魯亞 *Pillkallen* の方言
なり。左に一例を掲ぐ。

Das süße Mairieche.

Ach Mairieche, sötet Mairieche mien,
Ach kunnst Du doch mien egen sien!
Eck kann nich läwe ohne Di,
Du Engelskind, mien lev Marie.
Woll send wi beide, beide oarm,

Doch oarm to oarm, dat hölt sik warm,
War miene Fru, dat eck ehn Herz
Doch häbb fär all mien Glöck un Schmerz!
Seg joa, un eck benn äverriek,^{α)} α überreich
Kein könig kömmt an Glöck ons glick.—!—

Fu brust de Orgel, et lött de Glöck,
D, Brüdgam geiht en geborgte Boek,
He hätt keine eigene Stevel an,
De junge, schmucke, leichtsinnige Mann.
Un an sienem Orm en gold'gem Hour,
Met Oge, hell wie de Sonn so klar,

Do hängt Marieche, de schönste Därrn,
Welk Glück stroahlt von ehre schneewitte Stärrn.
Wat froage se Beid'noa Aeker un Plog,
Se hebbe sich nu, un Lat ös genug.—

Fünf Johr send dohenn, vöer Kinderkes kleen
Gebrocht het de Odebor Lungebeen; ⁽²⁾ ⁽²⁾ storch.
De Mutter arbeit bitt spät en de Nacht,
Dem Mann erlohnt schon de Arbeitskraft;
Denn wie se sik quäle biem beste Wölle,
Et langt doch nich ömmer den Hunger to stölle.
De Mann ward verdrieszlich ob all de Noth,

De Kinder griene to Hus no Brod;
Marieche negt noch für fremde Lüdd,
De o'le Hex Sorg huckt an ehre Siel.
Se kickt mit göftige Oge umher,
Ob nich wat entzwei to riete wehr;
Do kömmt de Mann möt doll in Gebirus
Torkelud om ehnt des Nachts no Hus.

Em ärgert nu schon de Spänn an de Wand,
He läwt no dut flietge Marieche de Hand—
De Hieb troff got, noch ehner g.v.—
Ade du Glück, gehant ob Lev!—

Du ohle Hex Sorg en de Fustick lacht
Un schlöckt sick wieder dorch Newel un Nacht—
Wat winnert so schmäzlich em Stärneschien?
Ach Marieche, sötet Marieche nien!

新桂冠詩人

チニソン卿の逝去以來久しく空位なりし英國詩宗の後嗣は、幾多の冷語行はれしのうちアルフレッド、オオステイン氏と確定したり。オオステイン氏が第二流の詩人に過ぎざるは夙に文界の定評にして何人も抗議する能はざるに、今此名譽ある桂冠詩人の職を得たるこそ、獨り英國文壇の怪訝のみならず、吾等も亦喫驚したる所なれ。氏が選に當りしは蓋

し其詩の巧妙なる爲に非らず、政治に於て保守に黨し、宮廷の御覺淺からざるに歸せざる可からず。桂冠詩人後嗣の問題は是迄文壇の談柄にして、論争冷評の燒點となりしものなれば、今この第二流の詞家が叙任に際して多少の評隲は英の騷壇に傳はりしなる可し。オオステイン氏詩集は倫敦マクミラン版六卷 Vol. I. The Tower of Pabel. Vol. II. Savona. roha. Vol. III. Prince Lucifer. Vol. IV. The Human Tragedy. Vol. V. Lyrical Poems. Vol. VI. Narrative Poems. あり。

中世に於けるエルギリウス

羅馬の大詩人エルギリウスが中世の所謂暗黒時代を通じて種々の見識誤解を経ながら、太く當時の人心に影響し、感化齊しく僧俗に及びて、前代の大智識として一般の尊敬を受けたる事蹟は思想の歴史に於て

極めて興味ある問題なり。近日フンネンシャイン社は此問題に關するコムバレットイが傑作の英譯を出版せり。Vergil in the Middle Ages. By Domenico Comparetti. transl. by F. F. M. Bercke. London. Swan Sonnenschein & Co. 25.

抑もコムバレットイの傑作は文致明瞭優雅、叙事整然として秩序正しく、一篇の大主意は全卷を貫徹して毫も蕪雜の風無く、獨りエルギリウスの運命を追蹤するのみならず、一方よりは中世の學術界及び民俗思想の歴史なり。本書を二部に分ち一半は文學に傳れるエルギリウス、一半は民間の俗説に跡を残したるエルギリウスを研究し、中世の人が此詩人を識知せしは歴史的、哲理神學的、文法的の三方面より見たるものにして真正の審美的翫賞は殆ど皆無なりといふ、近世の曙光漸く破來ると共にマンテはアルノのはどりより清曉なる美術家の心を以てエ

ルギリウスの真相を看破せり。假令中世の神學思想を外被としたりと雖も、彼が愛國心はエルギリウスを目して伊太利亞の國民詩人とし、此詩人が千古の感化を稱揚して曰く、

O i s'iu quel Virgilio, e quella fonte,

Che spande di parlar si largo fiume?

噫君はかの大なる語の葉の水をひろげ給ひし泉井ルシリオなるか

(地獄一の七九)

又淨罪界第七章十六にソルデルロの口を假りて

O gloria de' Latin, disse, per cui

Mostrò ciò che poteo la lingua nostra.

噫吾等の言語が其能くする所を示したる君はラテン人の光榮なりと。中世の思想是に於てか破れぬ。それより古典學者の勞力勤勉に

依りて全く古文化の光輝を發するに至りしは自然の經行にて怪むに
足らず。又一方に於て民俗の間にエルギリウスの傳説漸く蓄積轉訛
し來り、十三世紀に至てロレエヌ州の一僧ジョン某 *Dolopathos* といふ羅
旬詩を著はしてエルギリウスに關する俗説を歌ひ、俗傳學説是に於て
確然たる區劃を生じぬ。

ドロバトスはシチリヤの國王にして一子リニヤン *Laonin* をエルギ
リウスに托して教育を依頼し置きしに、繼母、心の善からぬ女にて、此子
に懸想して拒絶せられしを憤り、反りて王に讒して既に之を死に處せ
むとする時、エルギリウス魔術を以て救助すといふ物語なり。其他エ
ルギリウスの骨は波の上の城に葬られ、海潮之を浸す時は、忽にして雲
霧起り激浪空を排すといふ傳説もありて、中世紀の民俗が此大詩人に
就て有せし觀念には頗る珍奇の節あり。今此書の翻譯に依て此新智

識を得る人も多數なるべけれど、吾はまづ此書を繙くに先て、十數頁の
小品論文なれど

Hugo Schuchardt—*Romanisches und Keltisches* (Strassburg: Karl Trübner)

中なる「中世に於けるエルギル」の一篇を勸む。シウハルトは知名の羅
曼學者にして、多識博聞、所説の信憑すべきは論を俟たず、而も行文明潔
實に「エッセイ體」の秘訣を得たり。

(補遺) コムバレットの原著は *Vergilio nel medio evo* と稱し、千八百九十
六年 *フイレンセ* 第二版あり。Ditschkeの獨逸譯は既に千八百七十五年
ライプチヒ に於て上梓す。中世に於けるエルギリウスに關しては
Zappert—*Virgils Fortleben im Mittelalter*, Wien, 1851; Roth—*Ueber den Zauberer*
Virgilius in Pfeifers Germania, iv, S. 257-298, 1859; Swieger, *Der Zauber Virgil*,
Berlin, 1897 等を参照すべし。

Dolopathos の原著は中世の羅甸文なれど Herbers 之を佛蘭西の韻語に譯したるもの後世に傳れり。千八百五十六年初めて上梓す、*Li Romans de Dolopathos*, publiée pour la première fois en entier par Ch. Brunet et Anat. de Montaiglon, Paris, Jannet, なり。書中「*Robertus*」王の名を解釋してかくすべし。

Por ce ot nom Dolopathos

Car il souffri trop en sa vie

De douleur de tricherie

四十八

この物語は東邦の産なりといふ七賢人の傳説を有するが故に頗る學者の注意を惹き、隨て参照書籍に富めり。其二三を擧げむに

Musafia—*Uelker die Quelle des altfranzösischen Dolopathos*, Wien, 1865; *Beiträge zur Litteratur der Sieben Weisen Meister*, Wien, 1868; *Oesterley-Jch. de Alta Sylva*

Dolopathos sive De rege et septem Sapientibus, Struss. and T. nrl. 1873; *Gaston Paris-Romania*, ii, 1873, pp. 481-503 の類なり。

佛國翰林院

佛蘭西は他の歐洲諸邦と異り、學藝の最高樞府とも稱すべき一種特殊の團體を有し、以て公衆の趣味を指導し學海の指針たらしむ。千六百三十五年宰相リシエリウ、王命を奉じて佛蘭西翰林院の基を定めしより茲に二百六十有餘年假令ドデエが *Les Immortels* に罵りし如き冷嘲を被る事屢々なりと雖も、翰林院が佛國並に世界の學藝に向て貢獻せし功績は決して没す可からざるなり。マシウ、アアノルドが「批評論集」卷一を繙きし人、若しくはセント、ブウヴが「月曜評論」を讀みたる者は「アカデミー」が感化影響の如何に盛大なるかを知るに足らむ。頃者碩學頻

五十八

りに逝き會院亦二三の欠位を生ず。史家ギクトル、デュリイの歿するや、
シウル、ルメートル（一八五三生）選ばれて其後を繼ぎ、例の如く任選式に
當り、快辯を振て故人の偉績を頌し、肥馬輕裘の聽衆を喜しめたり。會
員グレアル續いて輕快なる語調を以て此新選會員を迎ふる辭を述べ
たりといふ。ルメートルは慧眼犀利の文士、創作批評並びて世に行は
る。吾人近日彼が同時代の文士を品臨したる評論數種を讀み、密に其
明暢豁達の健筆に服したりしが、今此吉報を得て遙に之を祝せむとす。
今翰林院の員數尙は二を缺く、ドゥレンセツプと少デュウマとの空位なり。
聞く所に據れば後者に續いて新に選れむとする者は寫實派の泰斗エ
ミール、ヅラなる可しと。屢々アカデミーの門を叩いて常に志を得ざ
りし此文壇の老將も終に素志を貫くを得べきか。ヒエルロディの如き
一個の才筆のみ、艶蕩洒落の辭を聯ねて逸興を洩らすに過ぎず。誰れ

か「お菊さん」を以て「ラツムモアル」の列に置く可き。ロテイの近著なる聖
地旅行沙漠横斷の紀行の如き文辭の彫琢其極に達して幽婉の筆路頗
る誦す可く、前途の進境終に知る可からずといへど、未だ「ナナラベティウ
メン」の深刻沈痛なるに及ばざるなり。少デュウマ存生の頃常にヅラに
黨して選舉運動に盡力する所ありきと云へば、此文豪の新に選ばれむ
こそ故人への好き追善なる可けれ。邦人多く老デュウマの作を誦して
少デュウマの名を記せず。少デュウマ歿して未だ幾くもあらず、序なれば
其著作の二三を擧げて参考に資せむとす。

少デュウマ Alexandre Dumas, Fils

二世アレクサンドル、デュウマは一千八百廿四年を以て生る。小説家デュ
ウマの子なり。人あり若し、佛國近代の三大小説家を誰れとか爲すと

問はく、バルザック、サロルマ、サン、フロオベールを推す可く、輒近に降りて之を選まば、ドデエ、プラモオバッサンの三文豪を以て之に當つるを得。而して又戯曲界の三傑を求め來らば、オオジエ(一八二〇生)、少デュウマ及びサルドゥ(一八三一生)に指を屈す可きか。近代佛蘭西に世話劇起りしはフランツア、ボンサル(一八一四—一八六七)を嚆矢とし、諷刺嘲笑能く嬉劇の趣を盡くすど共に、幽麗可憐の愁歎を挿みて公衆の涙に訴ふる事を辭せず。是等の特色は佛國近代の嬉劇に浸染せり。少デュウマは第二帝政の文學を代表したる者なり。其作往々勸懲の意を寓すといふほどにもあらねど曲中副人物の口を藉りて人生の弱處社會の惡徳を指摘鞭撻する風あり。千八百五十二年、椿姫を著はして名聲頓に揚り永く公衆の喝采を博せり。近世狹斜の情を瀟洒なる對話に托し、奇警なる動作の發展を以て常道の羈絆を脱せむと企てたる如き眞に得

易からざる才筆にして、社會の真相を穿ち人々の性癖を描出する技倆に至りては絶倫の作家なり。

(補遺) 少デュウマの眞價は近來漸く評家の間に識認せられ、佛蘭西近代の文藝を研究する者が決して逸す可からざる作家なりと定められたり。今此戯曲家を精讀せむとする人の爲に参照書目と彼が著作とを擧げむ。

参照書目、*ジュウル、ジャン、フランシヌク、サルセエ、ジュウル、ルメエト*

ル等が評論の他、*Veiss, Essais sur l'histoire de la littérature française, 1857-*

1858;—Paul Bourget, Essais de psychologie contemporaine, 1886;—René Dumesnil,

Essais sur le théâtre contemporain, 1895—1897.

著作。(小説) *La Dame aux camélias, 1848;—L'affaire Clémenceau, 1866.*

(戯曲) *La Dame aux camélias, 1852; Diane de Lys, 1853; Le Bijou de*

la reine, 1855(en vers);—le Demi Monde, 1855; la Question d'argent, 1857; le Fils naturel, 1858; Un Père prodigue, 1859;—L'Ami des femmes, 1864; L's Idées de madame Aubray, 1867; Une visite de nocce, 1718; La Princesse Georges, 1871; La Femme de nocces, 1871; La Femme de laude, 1873;—Monsieur Alphonse, 1874; L'Etranger, 1876;—LaPrincesse de Bagdad, 1882; Denise, 1885; Fancillon, 1887.

マレエの新撰英辭書

言語研究の機運漸く熟して、精細緻密の議論重せらるゝに際し、辭書編纂の事業は大に學者の注意を惹きて、近時此種の著述續々出版せらるるを見る。然れども一二の異數を除くの外、漫に隱語方言の蕪雜なる

を收めて、徒に字數の多きを誇る類ひにして、眞の科學的著述と稱す可きもの少きは心ある者の憾とする所なり。今日の語學を論ずる者、概近西歐語學界に名聲籍甚するマレエの新撰英辭書を参照する所あれ。規模の宏大調査の嚴密を以て空前の良著なりと稱せらるゝ此辭書は實に千八百五十七年、英國語學學會に於けるトレンチ博士の演説に起因す。博士は英國に完全なる語源辭書の缺けたるを慨き、言語の歴史的發達を詳記して、變遷の逕路轉訛の順序を一目瞭然ならしむる著作の極めて必要なるを、切論したるに、直に會員の熱心なる贊助を得、自ら進で調査校正の勞を執らむとするもの七十六名、各奮て百二十家の著作を涉獵精讀して精密なる稿本の基礎を作りぬ。既にしてトレンチ博士はダブリン大僧正に歴進して歿し、ハアバアト、コウルリッジ嗣いて編纂主任の要務を執りしが、幾くもなくしてこれも易篋せしかば、フアア

ニヴル博士暫らく之に代り終に現時のマレエ博士編纂長となりて、數十年の大業漸く完成の緒に就むとす。此間に蒐集せる材料今や非常に積聚し、千八百五十九年此辭書編纂出版の事を汎く世に公布せしより、英米二國の篤學者招かずして、其學識と勞力とを寄進するもの頗る多く、千八百八十四年には、原稿の重量二噸に及べり。然れども之を鉛匱に附して公衆に頒賣せむとするは、實に空前の出版事業にして何れの書肆も進で其上梓を請負はむとするもの無く、獨りマクミラン社のみは、少しく規模を縮小して出版せむと言込みしが、フアニヴル博士固く執て動かざりき。七十九年に至りクラレンドン出版所評議員の決議に因り、編纂委員原案の規模に従ひ、この浩瀚なる草稿を上梓するととなしぬ。語毎に其意義を記し語源を註し變遷發達の歴史を説く事周到綿密在來の辭書中其比を見ず。第一に先づ或る語は何時如何に

して如何なる形にて又如何なる意義を取りて英語となりしか。又爾來其語が形跡と意義とに於て如何なる發達を遂げ、或は死語となり、或は猶生存し、或は轉訛したる順序と時代とを明記す。第二には以上の斷案事實を説明立證する爲に、諸家の文章を引用して、今日の言語學が探究したる其語の最古の出處よりして、最近の轉訛變遷したる用語例に迄及ぼせり。此項最も勞力を要す。各語に就て、十六世紀以前に、之を使用したる諸家の文例は、細大洩らず騰記し、少しにても轉訛の疑あるもの、變遷の跡あるものは、近世の文と雖も、及ぶ可くば逸せざらむやうに勉めたり。辭書編纂の歴史的敘述といふもの此の如くにして完しといふべし。是に至て吾等は西人が學藝に於て雄大豪壯の氣象と精緻周密の學風とを兼有するを賛歎せざらむと欲するも得可けむや。薄志弱行輕佻浮薄なる吾邦今日の學者と比して霄壤の差あり。

言語學の研究最も盛なるは、獨逸にして佛國も亦斯學を以て誇負するに足る。故に大辭書編纂に於ては英國は既に大陸の諸邦に先鞭を付られたる如き觀無きにしもあらず。かの一個人の驚歎すべき才識勞苦を以て成りしリットレエの佛語大辭書の如き、或は今日過半上梓せし碩學グリムの獨逸辭典の如き、マレエが新撰英辭書の未だ鉛筆に付せられざるに當て、既に公にせられ、殊にマレエ等は印刷植字の躰裁に於てリットレエに負ふ所少からずといふ。然れども新撰英辭書の用意周密にして、卷冊の浩漭なるに至ては遙に獨佛の辭書を凌駕し、以て英國言語學の光榮と爲するに足るべし。さきに蜚語あり。クラレンドン活版所評議員は先年の議決を翻へし、爾後出版の新撰英辭書の規模を縮めて上梓せむことを主張すと。これ大にトレンチの遺志に負き英國言語學者の名譽を毀くること甚しきものなれば、マレエ等の之を聽

す可からざるは、勿論なりと吾等は信じたりしが、其後果して何等の變を報じ來らず、終に昔日の雄圖を繼續實行するに似たり。吾輩は百般の障礙を排してマレエ博士等が大辭書編纂の偉業を完うせむことを祈ると共に英國國民が同情補助を此雄圖に向つて與へむことを切望す。和蘭陀國小なりと雖も、ドフリースが國民大辭典著々として三十年來の初志を貫かむとするに非らずや。

オット、ロケット Otto Roquette

獨逸の詩人オット、ロケットは千八百二十四年四月十九日ポオセン、クロトシンに生れ。千八百九十六年三月十八日ダルムスタットに逝きぬ。ドレスデン伯林に轉遊して文學歴史の教授をなし、後年ダルムスタットの「ポリテクニクム」に師たり。著す所小説戯曲批評の類廣く世に行は

れ、曩に獨逸文學史又千八百九十三年 *Diezig Jahre* と題する經歷談を著せり。然れども彼が著作の最も人口に膾炙するは *Waldmeister's Prantfahrt*; ein Rhein-Wein-und-Wandermärchen (Stuttgart, 1851) にして版を重ねると七十回盛名思ふべし。彼はまた樂人リストの爲に *Legende der heiligen Elisabeth* といふ「オラトリウム」の歌詞を物せり。ロケットの歿後 *ホルメ* 自ら彼が遺稿を蒐めて上梓したるを *Von Tag zu Tage* とし、戯曲 *Lanzelot* を收む。

六十九

(補遺) *ワルドマイスタルの歌*より *Wandervogel* の破題を抜出て、ロケットの詩風を示さむ。われは其輕快清楚なのづからなるを喜ぶ。

Kennst ihr den schönen goldenen Rhein

Mit seinem Duft und Sonnenschein,

Mit prächtiger Strömung seiner Wogen,

Von Berg und Felsen kühn umzogen?

Mit seinem Burgen, hoch und lustig,

Und segensreich und rebenluftig?

Dort weht ein Odem lebensprühend,

Dort tönen Lieder jugendglühend,

Und Weinsäfte wonnig quellen,

Weit auf des schönsten Stromes Wellen.

Wie Stern an Stern, so reihet sich dort

An Hügelketten Ort an Ort,

In jedem Ort ein neuer Wein.

Hier goldig, dort im Purpurschein,

Man wandert aus, man wandert ein,

七十九

Man glaubt im Himmel gar zu sein!
Dort Klang so manchem Musensohn
Des Lebens schönster, tiefster Ton,
Er ist auch mir, nun fern gebannt,
Des Weins, des Lieds gelobtes Land,
Und denk' ich voll Entzücken sein,
Ist mir's als schlürft' ich golden Wein
Ihr sollt's in diesem Liede spüren;
So kommt, zum Rhein will ich euch führen.

エドモン・トウゴンクウル Edmond de Goncourt

幽麗特殊の文致を以て、佛蘭西寫實派の小説家中一種の異彩を放てる

エドモン、ルイ、アントアン、ユオン、ド、ゴンクウルは、千八百九十六年七月十六日シアンプロセエなる其友ドデエの別墅に逝きぬ。兄弟小説家の名は近代佛蘭西文學數十年の歴史に喧傳し、小説家として、風俗史家として、繪畫聚藏家として、又有名なる「日記」の著者として、久しく文界の一勢力たりき。エドモンは千八百廿二年三月廿六日ナンシイに生れ、弟シウルに後るゝこと廿六年にして卒す。此間兄弟合著の書目四十卷に上ぼり、Charles Demilly (1869) Sœur Philomène (1861) Renée Mauperin (1864) に文學者、看護婦、小女の心情を描出して、心理的運行の秘奥を暴露し、特趣の行文を以て、佛蘭西學士會院の典雅なるに反抗し、近代佛文に一大變動を興へ、大に新進作家を感化せり。其他 Germinie Lacerteux (1865) に侍婢の悲戀を、Manette Salomon (1867) に書家と雛形娘との熱情を、Madame Gervaisais (1869) に神秘家の心理を寫出したるは當代の文學に大刺戟を

與へたり。エドモンは十八世紀繪畫の熱心なる崇奉者にして、未だ其眞價の世に知られざる時より蒐集を務め、又深く日本浮世繪の趣致を愛して、其流行とならざる前より歌麿北齋等の肉筆錦繪を聚藏せるなど、詩文に美術に新奇瑰麗を愛する性あり。又彼の有名なる「ゴンクウル日記」は千八百八十五年より時々上梓し、佛文壇四十年の逸事品隲大家名人が著作の批評より日常交遊の些事に至る迄、一種獨創の筆路と着眼とを以て、往々其肺腑を照す妙あり。先頃出版の最後の巻は千八百九十二年より九十五年に亘り、エドモンが晩年益々ドデエと親み、常に其家に往來して夫妻を始とし、シエルシエル、ロクロア、シモン、コッペエ等と交りたるを見るべし。ショウル、シモンを評しては溫柔清雅、頗る趣ありといひ、詩人コッペエが未だ少壯の氣概を失はざるを賞したるなど、エドモンが觀察の明を窺ふに足る。臨終の時、ドデエに遺囑して曰く願

くは吾獨力を以てゴンクウル學院を創設して現代小説の大家拾名を網羅し、年々第一の佳什を出したる作家に五千法の賞を授くると共に、吾會員に各六萬法の年俸を興へむと。以てゴンクウルが佛國學士會院に對する嫌惡の情と獨立獨行の氣邁とを察す可し。而してゴンクウル學院の基本財産には所藏美術品の賣却高を加入す可きが故に、設計未だ確定せずといふ。會員八名は既に指名せられ、殘る二名は今猶選定中なれど皆小説家中より採用して一人の詩人論文家を許るさず。或人プラトオンが共和國の例を引て之を評せるもをかし。佛蘭西學士會院は諸般の品評あるにも拘らず、文藝奨勵の一大學會として、佛國文界を益すること明なり。是故に吾等はゴンクウルが感情の狹隘なるを賛せざれども、獨力を以て數百年間持續せる大勢力に反抗せむとする氣邁には感せざるを得ず。

佛蘭西文學史編纂

西歐文學の精緻なる研究に従事せむとするものは常に良好なる文學史の缺乏を感ず。獨り獨逸は周到匪勉の學風行はるゝ國なれば精緻密なる詩文の歴史其類少しとせざれど英國の如きに至ては近年漸く文學研究の正路に就き、二三良好の文學史あるのみにして連續完成したる古今文學史なきは學者の憾とする所、佛蘭西も亦これ迄種々の文學史あれど多くは十八世紀、十九世紀初年の詩文にのみ精しく、佛文學の起原發達變遷を詳叙して首尾貫徹せる國民文學の精神を一目瞭然たらしむるものなし。文獻學に基礎を置かざる文學の研究は、既に大半の價值を害せり、言語學の後景を有せざる文學史は、單に個人が主觀的推察にして、徒らに大言壯語、寸毫の新智識を興へず。英國の大學

は夙に茲に見る所ありて、大陸に於ける詩文の研究法を採用して精緻の研究に従事せり。吾、佛文を學ばむとするに當て此種の研究法に基きたる文學史なきを憾とせしが、今回一大佛蘭西文學史編纂の舉あるを聽いて年來の渴望遂に充たされたるを悦ぶ。

Histoire de la Langue et de la Littérature française, des Origines à 1900 は其標題にして編纂者は佛國戯曲に精通せる プレイド、ド、ジュ、ユ、 氏、出版書肆は巴里、Armand Colin なり。編纂の方針は標題の示す如く、近世文獻學の研究法に基きたる科學的方法にして、言語學の結果に助を求め、曖昧たる主觀的斷定の誤謬多きを捨て、細心周密の研究を以て、一々原文に遡りたる直接の新智識を供せむとす。是故に各部各時代皆それ〴〵専門の學者擔任して、畢生討究の結果を此書に注入するを吝まず。例へば戯曲の部面には編纂者自ら當り、國民的敘事詩の部分を レオン、ゴオ

チニ擔任したる如し。第一卷第二卷起原より千五百年に至る中世文學史の題目を左に掲ぐ。

第一卷—序文 Gaston Paris—緒論、佛蘭西語の起原 Te dinand Brunot—第一章宗教的叙話體の詩 Petit de Julleville—第二章國民的叙事詩 Léon Gaudier—第三章擬古叙事詩 Léopold Constans—第四章宮廷叙事詩 Léon Clélat—第五章「シヤンソン」 Alfred Jeanroy—參考書目

第二卷—第一章比喩談及び狐話 Leopold Surlin—第二章「ソブリオ」 Joseph Bédier—第三章薔薇の歌 Ernest Langlois—第四章教訓文學—第五章説教家及び翻譯家 Arthur Piaget—第六章修史學 Charles V. Langlois—第七章中世末路の詩人第八章戯曲、「Petit de Julleville—第九章十四世紀末に至る迄の佛文學—參考書目。

此の如く當代の碩學各其專攻の結果を齎らすと同時に、本書叙説の躰

裁精神に就て相互の協議を歴たれば、合同一致の風を失はず、優に首尾貫通の文學史としての價值あるべし。かのベネディクティヌ派が大佛蘭西國文學史編纂を思立ちしは實に千七百三十七年にして、爾來茲に百數十余年、三十一卷の浩瀚なる著作を上梓したれど僅に十四世紀に達せしのみ。素より此大著も特殊の價值あるに相違なしと雖も、今回の大佛蘭西文學史は羅句語文學と價值なき模倣詩文とを省略し、又始より八卷百十章の制限を設けたるが故に、千九百年を以て必ず完成の運に至るべしといふ。本書の方針は實に以上の如き文學研究法の精神を發揮したるものにして、卷毎に數葉の着色及び無色の寫眞版を挿みて古寫本の躰裁を示すと共に、精密なる參考書史又ブリュノオ氏が明快なる佛語史を附して、文獻學的研究を怠らざらむとす。

ダンテの俗語論

南歐の詩聖ダンテが清新の詩風を創めて終に國民文學の基礎を置きしは、全く無意識の事業にあらず。彼が深く言語の彫琢に留心して、標準語の一定を熱望し、伊太利亞俗語の爲に頗る力を盡し、は特に「俗語論」といふ冊子に明なり。謂ふに此書は羅曼文獻學史に於て第一に詳論すべき著作なり。近年瀛西の學藝界にはダンテ崇拜の氣風非常に盛にして各國殆どダンテ學會の設立なき所なし。千八百八十八年創立の伊太利亞ダンテ學會は月報を發兌して研究を積みしが、今回始てダンテ著作の出版を企て、先づ彼が「俗語論」II Trattato De Vulgari Eloquentia. Per cura di Pio Rajna(Firenze: successori Le Monnier)を上梓せり。

抑も「俗語論」の初版は羅甸の原著にあらずしてジャン、セオルジオ、トリッシ

ノ Gian Georgio Trissino 伊太利亞譯なり。Dante de la Volgare Eloquentia; tradotte in lingua Italiana; Vicenza 1529. と題す。羅甸原文の初版は千五百七十七年フレンゼの逐客ヤコポ、コルビネリ Jacopo Corbinelli がメデイチのカタリイナに保護せられし時上梓し爾後の翻刻 Forri (Livorno 1855) Fraticelli(Fir. 1857) Giuliani (1873) は左したる差異なく、嚴密なる字句の批評を経たるものにあらず。今ライナ氏は十四世紀の末年の騰寫本 G(クルノオブル市立圖書館本)と同時代の T(トリヴルチオ家本)に基き、傍らヘムボオ僧正の割註書入ある V(ブライカン本)を参考して嚴密なる批評法を用ゐること十年餘なりきといへば、必らず良好なる著なるべし。因にいふ、昨年オクスフォード出版ダンテ全集の著者ドクトル、ムウア氏は今回またダンテに關する攻究を著はし、第一卷にはダンテの詩中聖書及び希羅古典の直接引用六百餘條及び許多の類例を詳説し、第

二卷にはダンテの批評攻究十數件を網羅すべしといへば、ダンテ學に裨益あると少小ならざるべし。

ハウプトマン Gerhart Hauptmann

獨逸現代の劇詩人にして、近世思潮を鼓吹し、其明暗兩面を吟出して、餘蘊なきものは蓋しゲルハルト、ハウプトマン其人なり。千八百八十九年秋十月、伯林、レッシング座に於て、其新曲 *Vor Sonnenaufgang* の興行ありし時は、全都騷壇の論争、一時喧囂を極め、褒貶毀譽まち／＼なりしが、今や詩名噴々として國外に傳り、近獨大詩人として、西歐詩界の一方に濶歩するに至りぬ。ハウプトマンは千八百六十二年十一月十五日を以て、シレシエン州のオオベルザルツブルフに生れ、幼年より詩文の才ありて、尋常の職業に従事するを好まず、七十九年の頃、プレスラウの美術學

校に登りて、彫塑の術を學びしが、得る所少くして、幾もあらざるに校を去れり。謂ふに其天稟の材能は、造形術よりも寧自由なる詩歌戯曲の創作に適せるなり。其後此校の教師ヘルテルの從憑によりて、イエナ大學に遊び、靜に詩才を養ひし時、教授ベエトリンクの眷顧を受け、益々文學に身を委ねむと欲して、荐りに古典を研究し、希臘歴史に基きたる一戯曲の創作に熱沖する餘り、杖を曳て阿典に漫遊せむことを企てたり。千八百八十三年の春、志を決して南歐に下り、ナポリに達せしが、カリ島の絶美なるに心酔して、これよりまた東方に進まず。蒼空白浪の美郷に淹留して、詩想の走するに任すもの數月、新曲を物して舊師の批評を仰げるに、いたく非難の答を受けたり。失意落膽の餘羅馬にて再び彫刻を學びしが、熱疾の襲ふ所となりてはたさず終に故國に歸て、伯林大學の講筵に出席し、哲學歴史の二科を研究せり。此詩人の寧

静なき生涯は、なほこゝに留らず、千八百八十五年未だ廿二歳に満たざるに、意氣投合せる才女某と結婚し、相携てチウリッヒ大學に遊び、醫を學ばむとして、特に暫く精神病學の一科を専究し、終に故里に歸て、多幸なる詩人の家庭を爲すに至れり。彼は年少氣鋭未だ春秋に富み、前途頗る有望なる戯詩家と稱すべく、獨逸文壇に、多年見る能はざりし獨創の作家と激稱せらるゝも、溢美にあらず。特に其戯曲的詩才に富めることは、何人と雖も首肯する所なり。著す所 *Der Apostel*, *Kollege Crampton* *Vor Sonnenaufgang*, *Das Friedensfest*, *Einsame Menschen*, *Die Weber*, *Hunnele*, *Florian Gejer*, *Die versunkene Glocke*. 等皆近獨劇詩中の名什にして、寫實理想二派の美を包容して、一團と爲したる如く、ヅラの餘韻あり、トルストイの反響あり、又北歐の大劇詩人イプセンの面影髣髴たるなかに、自ら特殊獨創の異彩を有せりといふ。

ピエール、ロテイの新著

幽麗の彩毫を振て、婉美の感情を寫し、自然人心の微韻を傳ふるを以て、現代の佛文壇に名聲噴々たる翰林院のピエール、ロテイは、このごろ *Bann-telo* と題せる新著を公にしたり。傑著 *Pêcheur d'Islande* の篇出で、より茲に十一年、この間の著作敢て少しとせず、皆微妙幽婉の趣を盡したる名文なれど、多くは漫遊紀行隨感錄の類にして、眞に空想を驅使したるものにあらず、近著 *ラマンチオ* の一篇、多年の作品を凌駕して、ロテイが獨得の美所を具ふ。緑葉きはみなき佛蘭西の西南隅 *ビスケエ* の波の音を進み、*ピレネエ* の雪をよけて *エチエザル* の一村落あり。幾千年の名残をとめて、*バスク* 種族の一群すまへり。 *ラマンチオ* はこの村の一寡婦 *フランシタ* の愛子にして、十五年前、母が *ピヤリッツ* の里に、佛國一貴

族のおもひ者となりて生落したる薄倅のわすれがたみなり。同村に寡婦ドロレスあり。アロシユカ、グラシウスといふ一男一女ありて、ラマンチ^カの家に程近かれど、この二人の寡婦は親密なる交なかりき。ただアロシユカは同じ齡のラマンチ^カと相睦みて、ペロタといふ球投の遊に日を暮しぬ。妹のグラシウスは長ずるまゝに天成の麗質いよく光を添へて、この村の花と歌はれ、ほがひ祭の庭に人目の的となりしが、幼きより往来せるラマンチ^カの雄々しさを慕ひて、それとしもなき戀に襲はれたり。ロテ^イが此情の消息を傳へむとして、例の多感なる神経性を逞らし、靈活なる措辭を傾注して客まざりしは、此新著の名を爲し、所以なり。幽なるもの、微なるもの、縹緲として捉ふべからざるもの、名香の薫する如く全篇に瀰れり。栗の樹の日かげにグラシウス、ラマンチ^カ、あひひきのあたりは、名にし負ふベルナルダン、ド^ミサン、ピエルガ^ボオ

ル、エ、并ルヲニイの名作と比肩するに足る。境を超む谷に潜み、西佛兩國の密輸入を業とするラマンチ^カは、屢戀人の兄アロシユカと冒險の夜を過して村にかへりぬ。春の雲をわけ、青き山にむかひ、緑の谷を過ぎて泉清き野、無花果の原に迷ふ。村の森に入る時、グラシウスは常に戀人の腕に倚りて、けふはスペルノアの里の蓬酒の香りす、きのふはマンヨ^ルピの山の薄荷のにはひし給へりど、はかなき物語に、月の落つるを知らず。かくて樂しき戀の夢は、しばし二人をつゝみたれど、からき世の波は終にこれを破れり。西班牙國民の資格得むとして、ラマンチ^カは心ならずも募集に應じ兵役に服すこと三年、家に歸てさきの戀人を求むれば、かれはすでに尼となりて遠き國境の精舎にうつりぬ。母なるドロレスの爲に思はぬ物持の妻と定められ、心迫りて聖衣の袖に握を守りしなりけり。ラマンチ^カこゝにアロシユカと謀りて、かの尼寺に闖入

し、昔の戀人を恢復せむと欲して、先づ何心なく精舎の聖徒等と物語りしに、愛欲のたちがたきを棄て、半生の熱情をこゝに葬りし尼僧の清淨敬虔なるに感じ、頭を俛れて寺門を辭するに至る。アロシカは故里の山に歸りて密輸入の業に復し、ラマンチヤは南米の野にさすらひゆきぬと。ロテ、の名は邦人の聞知する所なれど、其麗筆の翫賞に至ては未だ決して盛なりといふべからず。多情多恨の詩想を抱て異郷の旅愁に耽り、稀世の才筆を以て、其感慨を寫したる幽婉の筆路は、現代第一と稱すべく、今回の新著は、清愁、嬌艶相交りて、ことに人生の悲哀に對する著者の同情を含みたるを以て著るしとす。

(補遺) ロテ、著作目録

Aziyadé (1876); Baharu ou Mariage de Loti (1880, 1882); Le Roman d'un Spahi (1881); Fleurs d'Ennemi (1882); Mon Frère Yves (1883); Trois Dames de la Kasbah

(1884); Pêcheur d'Islande (1886); Le Desert, Madame Chrysanthème (1887); Propos d'Exile (1887); Japanneries d'Automne. (1889); Au Maroc (1890); Le Roman d'un Enfant (1890); Le Livre de la Pitié et de la Mort (1891); Fantômes d'Orient (1892); Le Galilée, Jerusalemne Matelot.

翰林院の二新學士

近時佛國翰林院の學士に撰擧せられたる二文豪あり。一をアナトル、フランス Anatole France とし、他をアンドレ、テュリエ André Theuriot とす。前者は小説を物し詩を賦し評論を草し、後者は靜寧なる田園の風雅を歌ひ、特に南佛蘭西の綠野清流を愛す。アナトル、フランスは千八百四十四年四月十六日巴里の一書舖に生れ、スタニスラス校の科程を卒へて、文學に従事せり。千八百六十八年上梓アルフレッド、トマ、ギニ

イの評論は彼の處女作にして、以後詩篇小説の類滾々として其詩囊よりとりいづること十年「ルタン」新聞に筆を執て毎週婉美なる麗筆を以て讀者を樂めし傍ら *Jocaste et le Chat maigre* (1879) *Le Crime de Sylvestre Bonnard* (1881) *Thais* (1890) *La Potisserie de la reine Pédauque* (1893), *Le Lys rouge* (1895) 等の小説を著し、富瞻の學殖と天稟の詩才とを顯はし、が時々犀利にして而も露骨ならざる警句を下し、當代の文學を評隲す。聚めて *La Vie littéraire* (1888, 1890, 1891, 1892) 四卷にあり。例へばバシキルトセツツ女の日記を評して、此書の最大價值は著者の死なりといひ、ルメエトルの「セレニウス」を繕きて、書中の碑銘最も誦すべしといひ、バルザックを呼んで彼小説家にあらず、寧ろ歴史家なりと論じたるを以て皮肉家なるを知るべし。或人が現代佛文壇の三大批評家を比照して、Brunetier(一八四九生)は評壇の那翁、Lemaître(一八五三生)は其マザラン、Anatoleこそ

ゾルテエルなれと評せしも敢て謬見にあらず。溫柔なる諷刺と都雅なる文脉とは蓋し此新翰林院學士の特長なるは *Le Jardin d'Épionne* (1895) を讀みたる者の知る所なり。選舉の後幾くもなくして *L'Orme du Mail* の著あり。大陸の文壇賞賛を以てこれを迎へぬ。

アンドレ、トゥリエは吾人が流麗閑雅なる短篇の作者として久しく知りし者なり。千八百三十三年十月八日マルリの野に生る。幼年より深林の聲を愛し、湍流の響、幽鳥の樂に心曠れて、めでたき挽歌頌歌の類をもものしたり。オルナンの森より出で、都門に入り、兩世界評論の上に獨得の田園趣味を發揚して、終に文壇の一角に據るを得たり。其文はデオジュの川露をそゝきたる野花の香をとめて、清妍優雅、棄て難き趣を帶ふ。著はす所許多の短篇を除くの外、劇詩 *Raymonde*, *Sauvageonne*, *Le Mariage de Gérard* 等あり。

(補遺) アナトル、シラキアの文藝と思想とは下の抄録を以て窺ひ知るに足る可し。 Le Jardin d'Épicure の抜萃なり。

Le temps, dans sa fuite, blesse ou tue nos sentiments les plus ardents et les plus tendres. Il affaiblit l'admiration en lui ôtant ses aliments naturels : La surprise et l'étonnement ; il anéantit l'amour et ses belles folies, il ébranle la foi et l'espérance, il déflorit, il effeuille toutes les innocences. Du moins qu'il nous laisse la Pitié, afin que nous ne soyons pas enfermés dans la vieillesse comme dans un sépulcre.

八十百

C'est par la pitié qu'on demeure vraiment homme. Ne nous changeons pas en pierre comme les grandes impiés des vieux mythes. Ayons pitié des faibles parce qu'ils souffrent la persécution et des heureux de ce monde parcequ'il est écrit : " Malheur à vous qui riez ! " Prenons la bonne part, qui est de souffrir avec ceux qui souffrent, et disons des lèvres et du cœur, au malheureux comme le chrétien à Marie :

" *Fae me leum plangere.* "

L'Ironie et la Pitié sont deux bonnes conseillères ; l'une, en souriant nous rend la vie aimable ; l'autre qui pleure, nous la rend sacrée. L'Ironie que j'invoque n'est point cruelle. Elle ne raille ni l'amour ni la beauté. Elle est douce et bienveillante. Son rire calme la colère, et c'est elle qui nous enseigne à nous moquer des méchants et des sots, que nous pourrions, sans elle, avoir la faiblesse de haïr.

九十百

近刊書選

汗牛充棟も當ならぬ西歐文界の新刊中特に英米の人が争て繙讀する近著を揚げむに、先づ倫敦の書肆が千八百九十七年發賣高最も多かりしといふものは左の如し。

一、小説類

- Hilda Stafford. By Beatrice Harraden.
 The Massarenes. By Ouida.
 The Well-Beloved. By Thomas Hardy.
 On the Face of the Waters. By Mrs. Steel.
 The Green Book. By Maurus Jokai.
 Christine of the Hills. By Max Pemberton.
- 一、歴史傳記類
- Life of Nelson. By Captain Mahan.
 The History of the Papacy. By Bishop Creighton.
 Ancient Greek Literature. By G. Murray.
 The Age of the Despots. By J. Symonds
 Bell's Cathedral Series.

- 一、詩歌戯曲類
- English Sonnets. By G.
 The Battle of the Bays. By O. Seaman.
 Paradise of English Poetry.
- 一、旅行記類
- The Fall of the Congo Arabs. By Capt. Hinde
- 一、文學書類
- Flourishing of Romance and Rise of Allegory. By Saintsbury.
 Temple Classics. (Montaigne's Essays. Morte d'Arthur.)

翻て米國讀書界の流行を窺ふに、紐育、ホストン、桑港、トロント、費府、ピッツ
 ハアツ等の書肆が報告に據れば、次の數種を以て新刊中最も人意に投
 じたるものとす。

1. Quo Vadis. By Sienkiewicz.
2. On the Face of the Waters. By Mrs. Steel.
3. Phroso. By Anthony Hope.
4. On Many Seas. By William.
5. Sentimental Tommy. By Barrie.
6. Tess of the D'Urbervilles. By Thomas Hardy.
7. The Green Book. By Maurus Jokai.
8. Farthest North. By Nansen.
9. The Seven Seas. By Kipling.

前記の表中、トマス・ハアディの小説は、英米の人士共に愛讀すと覺ばしく、英人は彼の新著を賞し、米人は未だ彼の數年前の作に眷戀して卷を措く能はざる感あり。又兩國共に流行する Quo Vadis の作者 シエンキ

エキチは、波蘭の人にして壯時米大陸を遊歴して、逐客の辛苦を嘗め盡し、後歐洲に歸りて身を文界に投じ、夥多の小説を物しぬ。前記小説は羅馬帝政の豪華を寫したる初代基督教迫害の物語なり。佛蘭西の雜誌「コレスボンダン」にも譯出せられて或る趣味の讀者を悦ばし、が、今亦英文に翻せられて大喝采を博したり。歴史傳紀、紀行等の部門に於て、先づ指を屈すべきは、ナンセン博士が北極探險記なるべく、英米はいふも更なり、西歐を擧て、一世の耳目を眇たる「フラム」號に注がしめしもの、素より贅言を要せず。又海上權力史の著者が新作の「ネルソン傳」は、題材といひ、筆路といひ、先年の月桂冠には新なる綠葉を加ふ。東歐南阿の形勢日々に迫れる現時に於て、又光榮ある孤立を誇稱し、大英主義を世界に發揚せむとする近英の人士に對しては、最も興味ある傳紀なるべし。詩壇に於ては「キプリング」第一に位し、雄勁清新の調を恣に

す。今の英國王立美術學校長なる、ポインタア氏が或る饗宴の最中に
起ち、陸海軍現役及び後備兵士が爲に大白を屬して、一場の演説を試み
たる時、諸士請ふ安せよ、トミイ、アトキンズの桂冠詩人は現はれたりど
いひしも實に溢美にわらず。畫家、ポインタアはキップリングの姻戚な
れども、此讚辭は何人と雖も首肯する所にして、吾等は光榮ある英文學
の歴史中、獨創の天才を以て彼を推さむとす。「七海」の絶唱今は米州
を聳動しつゝ、あるも亦故ある哉

四十二百

シイマンの擬似詩

オオエン、シイマンの擬似詩二卷、題して「桂葉の戦」といふ。收むる所僅
かに廿一首、初の九首はスフィンバアン、ワトソン、キップリング、ル、ガリエ
ンの詩を擬似して、巧妙を極めたるものにして、前記の表中にも見えたる
如く、刻下文界の注目を惹きつゝ、あるものなり。狂詩、元來文學の高尙
なるものにはあらざれど、名家の筆路を摸び、聲調を捉へて、機智諷諧の
趣を寓するは、尋常詩家の企及すべき所ならず。古より巧妙なる擬似
詩の極めて稀なるは此故なり。誰れかスフィンバアンが青春の絶唱「ド
ロウリイズ」の音樂を記憶せざらむ。妖艶瑰麗の調傳へて、シイマンの
擬似詩にあり。而も其内容はスフィンバアンが詩人としての閱歷を叙
したる批評の一片ならずや。

五十二百

Of Delight that is dear as Desi—er,

And Desire that is dear as Delight,

Of the fangs of the flame that is fi—er,

Of the bruises of kisses that bite;

Of embraces that clasp and that sever,

Of blushes that flutter and flee
Round the limbs of Dolores, whoever
Dolores may be.
Pantheist, bruiser and breaker
Of kings and the creatures of kings,
I shouted on Freedom to shake her
Feet loose of the fetter that clings;
Far rolling my ravenous red eyes;
And rolling a mutinous lid,
To all monarchs and matrons I said I
Would shock them—and did.
Hushed now is the bibulous bubble

Of "lithic and lascivious" throats
Ling'ring stript and extinct, is the stubble
Of hoary and harvested oats;
From the sweets that are sour as the sorrel's
The bees have abortively swarmed;
And Algegon's earlier morals
Are fairly reformed.

「小鮭の歌」The Rhyne of the Kipperling のふはキップリンズの詩風を學で、
全く其調を奪ひしもの、原詩を誦せしものは、少からざる興味を覺えむ。
實にシイマンの新著は、常規を以て律すべからざる特異の書なり。

中世文學史

十九世紀學藝界が歴史に於ける中世の顯要なる地位を承認してより、其文學の幽麗出色なるとも漸く識者の眼底に映じ來り、今や中世基督教の清秀なる面を慕ひ、東洋香泊の國より傳來せし物語類又傳説等を研究する者頗る多し。アルトル傳説、カロリゲン傳説、又遡りてケルト思想の考究は既に鞏固なる立脚地を學界に得たり。佛國翰林院のガストン、パリの如き斯學の泰斗として全歐の文壇に尊崇せらる。抑も中世文學に關する學權ある大著は千八百七十四年より八十七年まで時々上梓せし Ebert—Geschichte der Literatur des Mittelalters im Abendland なれど僅に三卷を以て止り、紀元千年迄論じ及ばしゝに過ぎず、學者の望に負く事久しかりしが、頃日倫敦大學の英文學教授カー氏此種の研究を叙説して *Epic & Romances*. By W. P. Ker. (Macmillan) といふ中世文學史を作れり。中世に於て英佛獨等の新邦に偉大なる叙事詩の發達を

り、又東邦諸國より十字軍其他史上の變動に因て輸入せられ、新文化の發展に連れて、幽婉の妙致を具備するに至りし傳説物語の勃興ありしとを精叙して、是迄専門の文獻學者が筐底に在りし智識を、一般の讀書界に紹介したるものなり。初に序論あり、次に日耳曼民族の叙事詩を論じ、第三章より英獨に發達したる叙事詩假令ばビオウルヴの如きを詳説す。

また吾はさまで感服せざれど、兎に角現時英評壇一方の大家たるセインツベリイ氏も先日同様の問題に關する冊子を著せり。カー氏の精覈着實なる研鑽に及ぶべくもあらねど、只學者の注意を此興味ある好問題に向けたる功は没すべからず。

十九世紀末に於て、非常の流行を來し最大賣高ありし小説の一は、デミ・モリエの Filiby (1894) なるべし。英米の讀書界一時この爲に狂する許なりき。流行は延て劇に及び、書に及び、寫眞に及び、裝飾品にまで及びり。デミ・モリエは千八百三十四年三月六日の生なり。輕妙の技を以て、永く「パンチ」に書き、惡意なき諷刺、豐富なる滑稽に交ふるに、温厚の情を以てしたれば、終始購讀者の敬愛を博して、英米の出版社會に知名の士なりしが、數年前始めて文筆の社會に投じて Peter Ibbetson (1891) といふ小説を「ハアバア」月刊雜誌に載せたるが、望外の好評を享け、殊に美術文藝の一端を心得たるものには、特別の興味を興へたれば、こゝに再び新奇の脚色と一種摸倣すべからざる妙文とを以て「トリルピイ」と云ふ小説を物し、復同じ雜誌に掲げたり。「トリルピイ」は巴里の畫工の堂に出入したる雛形娘が、催眠術の力に由て稀世の歌手となり、全歐の樂界

を聳動したる半世の物語にして、脚色極めて單純なれども、また頗る新奇、加之ならず文跡よく佛蘭西の輕快清楚なる條を浮べて、デミ・モリエ獨特の長技を顯はし、卷を措く能はざらしむる妙趣あり。而して全篇の後景は、趣ある巴里の美術社會にして、現代の名家おぼるげながら行文の間に隱見して、讀者の好奇心を激し、又所々に竄入したる繪畫音樂の評論等、字々肯綮に中り、幾微を穿ちて、此書の光采たり。吾等始めて之を「ハアバア」の誌上に讀み、非常の愉快を感せしに、暫らくして英米讀書界の需要驚く可き度に上りしを傳聞せり。吾邦在留の英米人亦爭て之を購讀し、横濱の書肆は數日にして第一回の積荷を賣盡せりといふ。爾來デミ・モリエの名は評壇の深く注意する所となり、畫工としてよりも、寧ろ作家として汎く知らるゝに至り、彼が第三の小説 Martian がまた「ハアバア」の誌上に出でし比は名望愈々揚りぬ。然るに天永く此

作家に齡を假さず、「マアシャン」最後の校正を終りて數日、千八百九十六年十月八日急に病を得て歿せり。享年六十余、未だ老たりとなさず。文壇の經歷殆ど彗星の如くにして逝きぬ。千八百九十七年六月の號を以て「ハアバア」誌上の「マアシャン」は稿を終れり。

(補遺) George-Louis Palmella Busson du Maurier の Frilby が一時英米の文壇を風靡して非常の流行を極めしは實に驚く可き勢なりき。書肆の説に據れば「トリルビー」の發行部數は無慮二十五萬なりきといふ。デ・モリエははじめ原稿料として二千鎊を受けしが、其後大時好を來せし時、書肆は彼を徳として、印税に改め、先づ直に四萬弗を贈れり。Marian に對してはまた直に五萬鎊の筆資を呈せりと聞く。れもふにデ・モリエの著書は一時の流行にあらず。文辭の法規を脱して、幽微の思想を傳へ、彩多く香深さを妙とす。例へばトリルビ

イが催眠術の奇効によりて Chopin の Impromptu (A Flat) を歌ふことろ、樂聲を文辭に移したる近文の絶妙なるものなれば録して未讀の士に供す。

Then comes the slow movement the sudden adagio, with its capricious ornaments,—the waking of the virgin heart, the stirring of the sap, the dawn of love; its doubts and fears and questionings; and the mellow, powerful deep chest notes are like the pealing of great golden bells, with a light little pearl shower tinkling round—drops from the fringe of her grand voice as she shakes it.....

Then back again the quick part, da capo, only quicker, hurry, hurry! but distinct as ever. Loud and shrill and sweet beyond compare—drowning the orchestra; of a piercing quality, quite ineffable; a joy there is no telling; a clear purring crystal stream that gurgles and foams and bubbles along over sunlit stones; “a wonder, a

world's delight!"

.....
And in a minute or two it is all over, like the lovely bouquet of fireworks at the end of the show, and she lets what remains of it die out and away like the after glow of fading Bengal fires—her voice receding into the distance—coming back to you like an echo from all round, from anywhere you please—quite soft—hardly more than a breath, but such a breath! Then one last chromatically ascending rocket, pianissimo, up to E in alt, and then darkness and silence!

基督の訓誡

十九世紀の末葉に於て、千數百年來の神學者が、未だ曾て説及ばざりし基督の訓誡を、新に發見せむとは實に史上の奇事と謂ふ可し。歲月は

萬物の破壊者なると共に、又其保存者にして、古來永く湮滅したりと思考せられしものも、探掘者の勞力に由て再び恢復せらるゝことは、其例無きにあらず。往年アリストテレエスの「阿典憲法論」の發見に由て、古典學、法制學の上に如何なる光明を興へしかは、學者の熟知する處なり。然れども開明國の人民が、天啓教として尊奉する宗教の開祖、神子基督の訓誡と稱して、未だ前人の知らざりし文辭を、今日に於て發見したるは、殆ど夢の如き感あらずや。牛津大學のグレンフェル、ハントの二氏、阿弗利加海樓府の南、百廿哩の地、昔オクシユリンヒオスと呼べる舊址に、探掘を試みて、紀元一世紀乃至三世紀の古寫本數多を發見したるなかに、紀元二三世紀に屬する斷篇の傍に於て基督曰と書きたる訓誡、凡て十八の零章を拾聚したり。書體其他の考證を以て推す時は、紀元百五十年乃至三百年の寫本にして、説く所皆福音書中の言と獨立せり。其一

例を英譯もて掲ぐれば下の如し。

Wherever there are.....and there is one.....alone, I am with him. Raise
the stone and there am I.

此珍寫本は着色寫眞版を以て遠からず上梓し、英譯を加へて公衆に發賣すべしといへば、幾くも無くして高等批評學界の論議となり、宗教界の話柄とならむ。其他今回發見の古寫本は幾多の函に收めて、既に英國に運送し、其裡聖馬太傳、ホメエロス、デモステネエス、アリストフ、ネエスの斷章のほか特にサッポオの零墨は新智識を吾人に興ふるや否や、早く其結果を耳にせむことを望む。近時考古探掘の業盛に行はれ、時々、喜ぶ可き報道に接するは學界の慶事なり。現に前と殆ど同時に希臘に於ては、彼の有名なるパロス年代記の斷章を發見し、紀元三百三十六年乃至二百九十九年、歴山帝國よりディオドキの代に至る迄の正確なる

史料を得たりといふ。

六十年前の英文壇

英國女皇在位六十年の祝祭は、往事を追懷する好機となりて、殖産、軍備、外交の諸方面に於て、六十年前の英國は如何なる状態を呈せしかを説きしもの多し。而して六十年前の英文壇は、如何なる明星に由て飾られしか。并クトリヤ在位間、文運の進歩は實に其國民が光榮として、後世に誇稱し得るものにして、此間幾多の名著傑作、陸續として踵を接し、虚心にして前代と比照すれば、燦爛殆ど眼を眩せむとす。回顧すれば、女皇登祚の時に當ては、Stuart Mill も William Morris もなほ襁褓に在り、Swinburne は生れて未だ三閱月ならず、Macaulay は印度に居て吏務に缺掌し、Tennyson の名毫も聞えず、Browning の詩はたゞ二三親友の間に誦

せられたり。Prouty 姉妹は家計の爲に庠序に師となり、George Eliot は父の家に住み、Matthew Arnold 宛も此時小學校に文字を習ひぬ。

千八百三十七年六月の文界を猶精しく尋ねれば、ブラックウッド雑誌は既に創立第廿一年にして、論説欄には頻に近代の佛蘭西文學を紹介し、此月の號には、スタエル夫人及びシットオブリヤンの批評を載せたり。

「シェントルマン雑誌」はジョンソン博士に關する論説の外、見る可き作なく、セントレイ雑誌は Dickens の小説を掲載す可き筈なれど、著者の義妹メリイ、ホガアスの死に由て休稿の斷あり。「フレイザア雑誌」のみは獨り Disraeli の「エネシヤ」を掲げて頗る光彩を放ちぬ。新刊書にはマレエ書店より、Hallam の「歐洲文學史」第一卷、Milton の「英國史」第一第二卷、及び Byron 全集一卷、定價廿志を、セントレイよりは Theodore Hook の「マムク、ブラック、」 Samuel Lover の「ロリイ、オモア」及び Cooper の「イングラランド」を、ヘン

リイ、コルハウンよりは、Marryat の「スナアリイ、ヨオ」及び Disraeli の「エネシヤ」を、ロングマンズよりは Southey の「ドクタア」を出版せり。六十年前六月の文界は、斯くて陸離たる光彩無かりしかど、數年にして、非クトリヤ朝の大文學は蔚然として勃興するに至れり。

「近世神話學」

「近世神話學」とは人類學派神話學の主張者アンドルウ、ラング Andrew Lang の新著にして、重に博士マクス、ミユラア Max Müller の近著に對する答辯なり。博士が先日「神話學補説」を著はして、年來の持論言語學派神話學を主張して、人類學派の説を攻撃したるを、今茲に反覆吟味して一辯駁し、進で言語派の本城を陥落せむとするラング氏の意氣また盛なりと謂ふ可し。著者の始に斷れる如く、博士の詰難は堂々たる正面

攻撃に非らざれば之に對する答辯も隨て亦奇兵を用ゐざる可からず。これ本論の統一を缺ける所以なりと。緒論廿四頁例の明暢なる快文を振て言語學派人類學派の位置を示したるは注意すべき文字なり。ラング氏曰く言語就中病衰の狀態に陥れる言語が果して世界に於ける神話の大原因なりしか。或は之に反して神話は一般に太古思想の生存にして此思想たるわながち言語に因て發生したるに非らず、開明人は漸く之より脱出したるに非らざるか、マクス、ミュラー氏は前説を主張し、人類學派は後説を主張す。勿論双方共に神話を以て、開明社會には殆ど消滅せし一種の思想の産物とするに於て一致す。只マクス、ミュラー氏は言語が此種の思想を生じたりといひ、吾等は之に反して言語は之を顯はす一方便たるに過ぎざりきといふ、論理整齊、ラング氏の説に同するも、同せざるも、首肯せざる可からず。輒近獨逸學者の蹤を

追て神話研究を事とする吾邦の學者、或はマクス、ミュラー氏に全然心服して、其學術的權力を疑はざるものあり。知らず彼等は人類學派神話學に對して如何なる態度を執れるかを。

インジェロウ Jean Ingelow

ジャン、インシェロウ女史は近英巾幗文人の中名聲特に噴々たる人なり。千八百廿年リンコンシア、ボストンに生れ、父は銀行業に従事して多少の文學趣味を有し、母は蘇格蘭の産なりきといふ。女史の詩は敢て高遠なる理想、靈活の手腕ありといふにあらねど、温雅のうち頗る人情を動す風ある人なれば、米國人士の意向に投じ其大陸のみにても廿萬部の發賣を見たり、千八百六十三年始て新作の歌集を公にせむとロングマンズ社に托し第一版發市の後、暫くして母と共に此書店を訪れ、以

後出版の件に就て談する所あらむとせしが、初版發行思はしからざるを以て空しく斥らる。女史是に於て失意落膽、戶外に出でけるに一葉の紙片を持てる者に遇ひぬ、これ女史の書五百部の注文書なりきといふ。直に呼還されて第二版上梓の議を爲し以後決して書肆と何等の困難なかりき。女史の健筆は幾多の詩集小説に顯はれたるうち重なる者を擧ぐれば前記歌集のほか *The Story of Don* (1867); *Mopsa the Fairy* (1869); *Of the Skellings* (1872) *Fated to be Free* (1875) *Surai de Berenger* (80) *Don John* (1881) 等あり又童幼の爲めに物語を作りて英米の兒女を娛ましめ、文筆に於ける温雅の情は女史が平常性行の純潔にして且つ貧者の爲に盡せる慈善の業と相俟て汎く世人に敬愛せられぬ。されど女史一代の秀句を求むれば吾も人もリンコンシアの高潮を推さざるべからず。

I shall never hear her more
By the reedy Lindis shore,
"Cusha! Cusha! Cusha!" calling
Ere the early dews be falling;
I shall never hear her song
"Cusha! Cusha!" all along
Where the sunny Lindis floweth,
Goeth, floweth;
From the meads where mellick groweth,
When the water winding down
Onward floweth to the town

此清秀なる格調の全く世に忘らるゝは歳月を要すべし。

文學者と音樂

美術發展の逕路に従ひ、諸般の藝術各其特殊の状態を明にし來り、詩文は漸く樂聲と相遠ざかるに至りぬ。されば古代の叙事詩、抒情詩は極めて親暱なる干繫を音律に有せしが、開明社會の詩文に及で、誦す可く、咏す可からざる方向に發達せり。この故に今日の文學者にして、音樂の美を解せず、諧調の妙、糸聲肉音の幽婉に聳なるは珍らしからぬ事實なり。ドデエが「巴里卅年」の記に云はずや、ゴンクウルやツラヤ、フロオベエルや、皆樂聲の玄を知らず、トルゲニエフも歌者非ヤルドオの家より此術の趣味を學びしに過ぎず、狂愛の極、食を忘れ、時を覺え、ウングルン樂の悲愁熱烈に耳を傾くるもの獨り手あるのみと。然れども、近世の詞客、また往々、糸竹の術を熱愛して、其作品の裡に、高尚なる趣味、健

全なる批判を顯し、者も少からざるなり。故ルビンスタインが「樂話」は斯の道の泰斗が筆の跡なれば、論の外なれど、遠くは獨逸の小説界に、ホフマンあり、近くは先頃物故せし畫家兼小説家デモ、モリエあり。ホフマン(一七六六—一八二三)の著「Serapions-Briider」中「詩人及び作曲家」又は「マエステル、マルティン」の小話に先だつ會話に、歌劇に於ける樂律歌詞干繫を論じ、又バシストリナ等の名匠が、聖樂の基礎を置き傑作を示したるを詳叙したる如きは、今日の讀者が賛歎の辭を吝まざるものなり。デモ、モリエの音樂趣味はホフマンの如く高からず、批判また從て深遠ならずと雖も、かの「ピイタア、イベットソン」を瞥見せしものは、如何に彼が音樂の家庭に教育せられしかを知るべく、又絶筆「マアシャン」の裡にも、近佛の歌謠あまた窺入せられて頗る讀者の歡心を惹くに足るものあれど、「トリルピイ」の書中、シガパンの樂を形容したる樂辭は、彼が音樂の術に於

ける秀抜の透察なり。デニモリエの多才は丹青の術に身を獻じたる傍ら終に小説の難業に於て苦もなく兩大陸の英語社會を聳動せしが、時に餘暇を偷みて韻語をも聯ねたり。韻調流麗、用語清妍、溫雅の品性また自ら顯はる。「樂と死」を題する小篇十數行を今下に掲ぐ。以て彼が音樂を熱愛せし證左と爲すに足らむか。

Kindly watcher by my bed, lift no voice in prayer,

Waste not any words on me when the hour is nigh;

Let a stream of melody but flow from sweet player,

And meekly will I lay my head and fold my hands to die.

Sick am I of idle words, past all reconciling,

Words that weary and perplex, and pander and conceal;

Wake the sounds that cannot lie, for all their sweet beguiling—

The language one need fathom not, but only hear and feel.
Let them roll once more to me, and ripple in my hearing,
Like waves upon some lonely beach where no craft anchoreth;
That I may steep my soul therein, and craving nought, nor fearing,
Drift on through slumber to a dream, and through a dream to death.

(補遺) 本文所載 デニモリエ の詩は佛蘭西現存の大詩人 Sully Prudhomme シュリュイ、プルウドム (一八三八生) 作 L'Agonie の譯なり。茲に原詩を掲ぐ。

Ne me dites rien;

Faites que j'entende un peu d'harmonie,

Et je mourrai bien.

La musique apaise, enchante et délire

Des choses d'en bas ;

Bercez ma douleur ; je vous en supplie.

Ne lui parlez pas.

Je suis las des mots, je suis las d'entendre

Ce qui peut mentir ;

J'aime mieux les sons qu'au lieu de comprendre

Je n'ai qu' à sentir :

Une mélodie où l'âme se plonge

Et qui, sans effort,

Me fera passer du délire au songe,

Du songe à la mort.

.....

ベラミイの新著

有名なる“Looking Backward”の著者、エトワアド・ベラミイ Edward Bellamy は、多望なる二十世紀の夢を續叙して、労働組合の企圖を詳記し、政府監督の下に於ける社會主義の抱負を發揚せり。この新著を題して「平等 Equality of Sex」

此書の特徴は其極めて樂天的なるに在り。難澁なる諸般の社會問題は、容易くも茲に其解釋を見出し、幾多の經世家、哲學家者流が頭腦を苦めし貧民救濟策、資本家對職工の争鬭等も最も好望ある約束を以て多幸なる社會の外に驅出せられたり。未だ著者の預言に輕々しく耳を假し信を措かずと雖も、厭世の悲音何れの方向にも充滿せる今日の論議壇より、しかく活氣あり樂天的なる冀望の聲を聽くは、空谷の梵音も

音ならざる可し。

又喜ぶ可きは、著者が此書中に於て、毫も激越の論議を交へず、否なかゝる語調をさへ慎みて、滔々たる今日労働者を指嘆し憤激せしむる如き風無きことなり。由來社會問題を論ずる者往々衆に媚び世に諂ひ、俠者の美名を被り、濟民の大任を楯とし、反て流毒の筆を振ふ類あり、著者が同胞的相愛の精神を以て救世策の骨子としたる嘉す可からずや。想起す、ペラミイが初めて回顧録を著せしや、實に千八百八十七年の交なるを。爾來沈黙凡そ十載、其高著は全歐の國語に翻せられ、米大陸のみを以てするも、發市の數五十万卷の多きに及びしに、粗鹵生硬の書を編みて、徒に利を博せむことを嫌ひ、所信を枉げず、鍛鍊を積みて今回の新著を物し、は、近世の文壇に類多からぬ美事なり。著者は素性、人に矜らず、謙護の徳を具へ、近年専ら社會問題の解釋に心を潜めて、また餘

念無き如しといふ。吾等未だ輕しく彼が主張を信せず、而も其精神に至ては賛歎せざらむと欲するも得ざるなり。

キップリングの新作

大英現時の文壇に最も聲望あるものをキップリングとす。數年前、印度の邊隅に方言詩の新調を吟出して、大英の民衆を驚嘆せしめし以來、或は雄渾の韻語に、或は精練の短篇小説に、續々其の詩藝を傾出して、終に當代文壇の覇を稱するに至れり。されば英米兩大陸の新聞雜誌は、争てかれが律語の一片をだに掲出せむことを欲し、莫大の費を擲て、其短篇小説を獲たるものさへあり。實にや、七海の歌を誦して、始めて大英主義の空言壯語に非らざるを知るべく、ジャングル、ブック前後二卷、茲に英國人種が克己の美德と義務の觀念とを窺知るべし。曩に女皇治宇

六十年の盛式あるや、諸の詩人はれのがしゝの麗辭を聯ねて、國民の榮華に謳歌せしも、キップリングは獨り莊重の律語を作て、頗る敬虔畏神の意を鼓吹したり。彼の歌ふや必ず眞摯なり、雄渾なり。彼の書く所また隨て忌憚なく、矯飾なく、英人の習として簡潔なる雄大の言語を以てす。故に字々讀者の肺腑に徹して、肝膽相照らす感慨なくむばあらず、倫敦マクミラン社より發兌せる彼の新著 *Captains Courageous* は大西洋の霧深きニッフランド海上の漁獵を精寫して前人の未だ指を染めざる新生涯を明にし、*The Light that failed* に次ぎての大著なり。書中最も彼が文才の特色を顯はし、簡潔の語を以て海洋の變幻極なきを寫したるは下十數行の名文なり。

Harvey, being anything but dull, began to comprehend and enjoy the dry chorus of *navetops* turning over with a sound of incessant tearing; the hurry of the winds working

across open spaces and herding the purple blue cloud shadows; the splendid upheaval of the red sunrise; the folding and packing away of the morning mists, wall after wall withdrawn across the white floes; the sultry glare and blaze of noon; the kiss of rain falling over thousands of dead flat square miles; the chilly blackening of everything at the day's end; and the million wrinkles of the sea under the moonlight, when the jib-room solemnly poked at the low stars, and Harvey went down to get a doughnut from the cook.

北歐民族が海洋の愛未だ決して消磨せず。英文學の古今を通じて反響するものは、彼の澎湃たる海潮の音にあらずや。白浪蒼天の色彩は今なほ其詩人が熱愛する所、借問す、近代の文學中、獨といはず、佛といはず、露といはず、キップリングを除てかゝる簡潔の文中に海洋の秘を盡したる者ありや。

テニソン卿の傳

前桂冠詩宗テニソン卿の詳傳は其嗣子に依て編纂せられ既に版を重ねるに至らむとす。謂ふにテニソンの幸運なる生涯は、バイロン、バアンス等のそれと甚く異りて、悲劇なく、逆境なく、冒險なき單純の一生なりき。されど近世の人は詩人の家事を窺ひ私行を閲し、一切の詳細を知盡さすむば止まず、終に此書をして近年の大著たらしめぬ。テニソンの詩は典雅なり。されどそはホメエロス、ソフオクレエスの典雅にあらずして、テオクリトス、エルギリウスの典雅なり。又彼の調雄健なり。されどそは沙翁の雄健に非らずして、彌兒敦の雄健也。人生觀に於て、戯曲的透察に於て、彼はブラウニングに及はず。幽麗の妙はロセッティに、聲調の美はスピンバアンに一籌を輸したり。然れども音律の立を解

せず、詩情の眞價を分たざる俗衆は、徒に優麗の辭を喜び、流暢の調を重じて、終に彼をミルトン以來の大詩人と稱するに至りしなり。英人ならぬ外邦の學生も、また彼が詩の平易にして巧緻なるを喜び、彼が詩の夙に吾邦の英文學者が愛讀する所となりてより、英國の詩人をいふもの、稍もすればテニソンの妙を激賞して已まず。而も邦人の最も愛するもの Locksley Hall, In Memoriam の類とす。われもまたテニソンを尊崇する念に於て他に譲らずと雖も、彼をしも近世大詩人の首位に置くを肯する者にあらず。彼が詩の眞に贊嘆すべきものは、The Passing of Arthur の一節 The Lotus-Eaters, Ulysses, Crossing the Bar 及び Iliad 一節の翻譯並に Virgil, Octavius の詩なり。言ふまでもなく一世の高名なる詩人の筆なれば、餘の諸作と雖も優麗雅醇の姿あるものから、一流の評家が俗衆と聲を同うして、徒にテニソンを過稱するあるを厭ふ。テニソン傳

の發市にしてテニソン旨拜の一動機たらずむば幸なり。

ドブソンの詩集

Vers de Sociétéの作家として有名なるAustin Dobsonは曩に「オマア、カイヤム」俱樂部の大會に於て新作一篇を朗讀し、今また十數年の諸作中、意に適ひたるを蒐めて瀟洒たる一詩卷となしぬ。老來意氣なほ消盡せざるなり。Vers de Sociétéの鑑賞は滑稽の趣味無き者能くする所に非らず。況んや其創作をや。ドブソンの詩温厚にして而も諷世の意あり。笑中なほ涙を含み、平淡と巧緻とを兼ね、所謂アテ、カの鹽を有せり。邦人未だ「エル、ドゥンシエテ」の何たるを辨せざる者多し。茲にドブソン作のJocosa Lyraを録して讀者の參照に供ふ。

In our hearts is the Great One of Avon

Ingraven,

And we climb the cold summits once built on

By Milton.

But at times not the air that is rarest

Is fairest,

And we long in the valley to follow

Apollo.

Then we drop from the heights atmospheric

To Herrick

Or we pour the Greek honey, grown blander

Of Landor,

Or our cosiest nook in the shade is

Where Praed is,

Or we toss the light bells of the mocker

With Locker,

Oh, the song where not one of the Graces

Tight-laces,—

Where we woo the sweet Muses not starchy

But archly,—

Where the verse, like a pipe a-Maying,

Comes playing,—

And the rhyme is as gay as a dancer

In answer,—

It will last till men weary to pleasure

In measure!

It will last till men weary of laughter.....

And after!

佛蘭西古詩の體例へば Ballade, Rondeau, Villanelle, Triolet 等の律に於て現今ドブソンと駢馳し得る者スキャンハアン、アンドルウ、ラングの二人に過ぎず、而してドブソンは平淡雅醇を以て勝れり。

ドデエ Alphonse Daudet

アルフォンス、ドデエは西歐小説家中の餘々たる者なり。千八百四十年五月十三日、南佛ニイムに生れ、五十七年兄エルネストに後れて巴里に遊び、羅旬街頭ガムベッタ等と放談高論せり。始め詩を企て *Les Amoureux* (1858), *La Double Conversion* (1860) の作あり。六十五年に至る迄、*モルニイ*

侯の内閣に致任して第二帝政の内部に明くなりぬ。其頃漸く劇に志して *La Dernière Idole* (OJéon 1862) *L'Œillet blanc* (Comédie Française) (1865) 等喝采を博せり。然れども彼が本領は小説にありて、*トルゲニエフ*、*ツラ*、*ゴンクウル*、*フロオヘエル*と交りて寫實派に傾き、世話物の域に於て當代の文豪となりぬ。 *Le Petit chape* (1866) *Lettres de mon moulin* (1869) *Lettres à un absent* (1872), *Contes du lundi* (1873) *Robert Hermon* (1874), *Fromont jeune et Risler aîné* (1874) *Jack* (1876) *Le Nabab* (1877) *Les rois en exil* (1879) *Sapho* (1884) 等汎く全歐に愛讀せらる。就中「*ナバブ*」は彼が一代の傑著にして、性格の描寫、叙事の排列毫も間然する所あらず。「*巴里悲劇*」と題する章に、都大路の黄昏、咖啡店頭の光景を寫し、夫に棄てられし貴夫人と世に斥けられし秘書官とを點出したる邊はわが常に贊嘆措く能はざる所なり。「*ジャック*」はまた痛ましき職工の物語、「*サフォ*」は世に恐ろしき艶女の傳

にして、樂欲の絶ち難きを細叙し、筆路の緻密にして文脈の清妍なる、優にツラと相提て、現存名家の首位に立つに足れり。五十八歳未だ老ひたりとせず、なほ幾多の名著を物すべかりしに、悲い哉去月「*アデル*」座に於て一刺客の毒手に斃れぬ。 *ゴンクウル*の歿するや其遺産を以て新翰林院を建設し、*ドデエ*をして其院長たらしめむと遺言せしも、今回の凶事にて空しく畫餅に歸せむとす。 *トルゲニエフ*と會食せし當年の文豪今や只ツラを余すのみ。

ワトソンの新著

ワトソンは方今英國文壇に於て、典雅の詩風を有し、時に雄健の秀句を屬する名家なり。千八百八十年の交、始めて名を騷壇の一隅に列ねてより、短詩挽歌の類を以て漸く第一流詩家の間に入り、近時キッ

プリングの盛名に壓せられたる觀無きにあらねど、或部の人士は猶ほ彼が清妍の麗章を愛玩して措かざるなり。彼が近著 *The Hope of the World* は、ストア哲學觀を雅健の詩篇に叙し、聲調堂々として沈靜の美あり。冷索の談理に被するに、光彩陸離たる詩風を以てし、往々 *Quatrains* の調を捉へ、又 *Omar Khayyam* の韻を傳ふ。彼は終に薔薇水詩家の群を脱せりといふ可し。又 *The Unknown God* の一篇は、今日の人士が頻に萬軍の耶和華に謳歌して、凡神的信仰の合理なるを忘却する傾向を反駁して、此詩の根本的思想を昨年發見せられたる基督の「ロギヤ」に採れり。篇中特に興味あるは、英女皇六拾年祭の時、キツプリングがものせる詩篇に答へたる節なり。ワトソンは耶和華を以て、ジウス、オオディンの如く人間的勢力の神化に過ぎずとし、達人の渴仰を値する者ならずと説けり。キツプリングが荐に耶和華を忘るゝ勿れ忘るゝ勿れと云ふに對し

て曰く

Best by remembering God, say some
We keep our high imperial lot
Fortune, I fear, hath oftenest come
When we forget—when we forgot.
A lovelier faith, then happier crown
But history laughs and weeps it down.

其思想の可否は論せずとも、聲調自ら大家の風あり。彼も亦年來の令聲をよく保持する者といふ可し。獨り惜む、彼の詩に抒情の絶叫なく、又洒脱の氣韻なきを。

最近海外文學續篇は
此篇と同じく過去數
年間の文藝史料を掲
げて近々發市すべし

明治三拾四年十一月廿八日印刷
明治三拾四年十二月三日發行

定價參拾八錢

郵稅六錢

著作者

上田

敏

發行者

伊藤

時

印刷者

多田

次

印刷所

愛善

社

發行元

東京市日本橋區
大傳馬町二丁目廿一番地

文友館

東京市神田區小川町一番地

著 生 先 敏 田 上 士 學 文

しとつをみ

全 一 冊 定 價 七 拾 八 錢

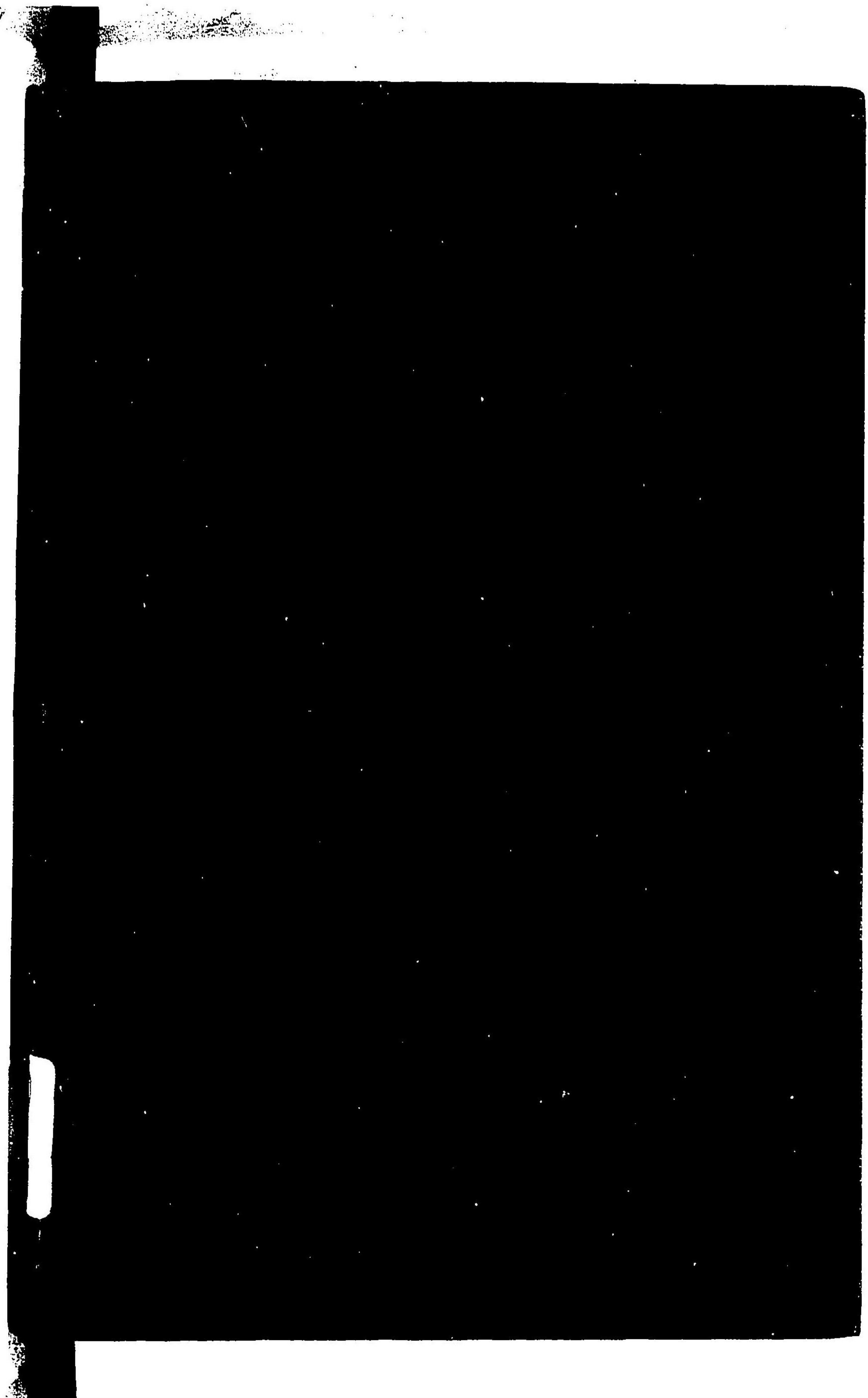
稅 郵 八 錢

『みをつくと』は海外今文の翻譯に
して佛、伊、獨、露、米、西、近代名家の雄篇
十數種を收む。歐米最近の思潮をや
まこの言葉に和らけ、巧みに耳新と
き調をなしたれば、古語の復活、新詞
の創作ありて舊様の文字に異なる
を特色とす。

30

191

30
191



191

084716-001-7

30-191

最近海外文学

上田 敏/著

M34.35

DBA-0040



